

『イスラーム国家など存在しない』

——ヌルホリス・マジッドとモハマッド・ルムの政治書簡』

(アグス・エディ・サントソ編、ジャンバタン社、一九九七年)

訳と解説… 佐々木 拓雄

後編

四 モハマッド・ルム 『イスラーム国家』という用語をむやみに使うべきではない

ジャカルタ、一九八三年四月二三日

平安あれ。

親愛なるヌルホリス君

あなた、あなたの手紙を受け取って私がたいそう驚くことを願っていたようですが、私はそれほど、いや少しも驚きませんでした。私は、あなたからあのような手紙を受け取ったことについて、ただ呆れ、狐につままれたような

訳 翻

気がただけでした。

しかし、たいそう驚こうが、やや驚こうが、呆れようが、狐につままれたような気がしようが、そうしたことは重要ではありません。私はとにかく、あなたがあの手紙を書いてくださったことにたいして感謝の気持ちをお伝えします。

正しく理解するために、私はあなたの手紙を何度か読み返しました。そして、望まれたとおりのあなたに返事を書くこのときまでにはすでに、そのために必要な過去の資料を読み直してもいます。あなたのお手紙を読んで、あなたとそのお仲間がたがイスラーム思想の刷新を進める構想を宣伝していた一九七〇年八月の記憶が蘇りました。あなたの回想によると、私はデイボネゴロ通り一六番地を訪れ、あなたに励ましの言葉をかけたことになっています。

私はそのようなあいさつをしたことを覚えていません。覚えているのは、当時インドネシア学生連盟バンドン支部長であった孫のアデイ・サソノが監修し、バンドンで発行されていた『ミンバル』誌に原稿を寄せたということです。そこで私は、「ようこそ。そしてがんばってください」と書きました。直に話をするよりも、何の社交辞令もぬきに『ミンバル』誌に原稿を寄せることで、私はあいさつを行ったつもりです。いま再びそれに目を通そうと思ったのですが、残念なことにその雑誌は見つかりません。そのかわりに、ある小冊子の複写を見つけました。その冊子のタイトルは「イスラーム思想の刷新」というもので、ヌルホリス・マジッド、アブドウル・カデイル・ジャエラニー、イスMAIL・ハサン・マタレウム、H・E・サイフディン・アンシャリーの四氏の論文を載せたものです。『ミンバル』誌のバックナンバーを探していた私は、ウトモ・ダナンジャジャの序文が付され、一九七〇年に発行されたその冊子を見つけることになったわけです。

私「当時その冊子を読んだ私」は、アデイ・サソノの依頼で執筆した『ミンバル』誌の原稿の冒頭で、ヌルホリス・

マジッド学士がイスラーム思想の刷新を行おうとしていると書きました。あなたの論文のタイトルは、「イスラーム思想の刷新とウンマの統合の問題」でした。序文の、サブタイトルの下に位置する最初の一文であなたはこう書いています。「このタイトルが示す問題に取り組みきっかけとなったのは、こんにち、インドネシアのムスリムがイスラームの思想と教えの実践において再びの硬直化を経験しており、闘うための意気込みや精神の力を失っている現実直面したことである」と。

第二章には、「イスラーム、イエス。イスラーム政党、ノー？」という章タイトルが付されています。引用しておきましょう。「それにしても、「イスラーム思想刷新への協力を」懇願する私たちには、いつも頭をよぎることがある。

それは、いま口頭や執筆物で示されているイスラーム指導者たちの刷新への意志が、どこまで本気のもので、どこまでの発展につながっていくものなのかということである。「答えは、次のような問いを立てることによって自ずと見えてくる。すなわち、彼らはイスラーム政党にいかほどの関心を寄せているだろうか——。現実を見ると、少数の者を除いて、もはや彼らはイスラーム政党／組織に何の関心も抱いていない。その結果、彼らはいわば「イスラーム、イエス。イスラーム政党、ノー」という態度をとるに至っている。したがって、イスラーム政党がイスラームに基づく闘争のための理念の器として存在してきたのだとしたら、現在、その理念が人を引きつける力をもたないことは明らかである。言い換えると、そこにある理念や思想は、いまや動力を失った時代遅れの化石となっている。さらにいうと、イスラーム政党はポジティブで共感のもてるイメージ作りに失敗したばかりではなく、実際にはその対極のイ

1 アディ・サソノは、一九四三年、中部ジャワ州ブカロンガン生まれ。NGO活動家であり、著名なムスリム知識人の一人。スハルト政権崩壊の直前に形成された内閣の協同組合大臣に選ばれ、以後もゴルカル党や自身が設立したムルデカ党などを足場に政治家として活動した。二〇一六年八月に死去。

メージをまとうようにもなっている」——。このようにあなたは書きました。

よく覚えているのですが、いま引用した箇所を私は、まだ見つかっていない『ミンバル』誌の文章でも引用しました。私に言わせれば、正しかりうが正しくなかりうが、賛同できようができませんが、これらの文言が、ヌルホリス・マジッド学士が、イスラーム思想の刷新というとてもなく大きな仕事に取り組むにあたつての根柢となるものであつたのでしょうか。

その小冊子を読んだ当初は予想しなかつたのですが、ヌルホリス・マジッド学士の主張は、まもなく広く世間の注目を集め、さまざまな新聞の一面で大きくとりあげられることになりました。

当時の私の反応は、世間とは異なつていたかもしれません。あなたにはお分かりでしょうが、私は自らが「時代遅れの化石」であると自覚しうる人間のなかに含まれていました。

私はあなたを「ようこそ。そしてがんばってください」と書いて迎えました。イスラーム思想の刷新を表明する誰かが現れたら、その人は常に歓迎されるべきだと思います。歓迎した後で、私たちは、あなたが言っていることはまだ単なる意思表明にすぎないのだという意味をこめて、がんばってくださいと伝えるのです。その改革者はこれから遠大な仕事に取り組みなくてはなりません。私は学者ではなく、ましてやイスラーム学の専門家でもありませんが、政治については少し知っています。それゆえ私は、死んだ化石と言われるのも平気なところがあります。私と私の仲間たちは、ある種の「冬眠」を経たばかりのところでした。四年と四ヶ月、スカルノ政権によって抑留されました。それは限られた時間の死ともいえるものでした。四年と四ヶ月は短い時間ではありませんでした。

私はあなたに、あなたが言っていることはまだ意思表明にすぎず、これからそれを実行していくことが大切なのだと言えただけですが、その点をあなたが理解していただくさつたようであれしく思います。「ようこそ」は、発

した瞬間に過去のものとなるあいさつであり、かわって「がんばってください」が現在形のあいさつでした。

私は、改革者というものはおしなべて、あなたがお手紙で書き綴ったような試練を受ける運命にあると思っています。あなたは思想の刷新と関係のない事柄についても論争をしなくてはならないし、「おとな気がなく、知的でもない」人々があなたを待ち構えてもいるでしょう。

私が思うに、あなたやお仲間がたは、可能性を切り開いてはきたけれども、ほんらい到達したい目的にはまだまだどり着けていないのではないのでしょうか。しかし私は、あの意思表明と位置づけられる構想を、なにはともあれ、あなたたちが実行に移してきたことをうれしく思います。

私はあなたがお手紙の六枚目で書いたことに同意できません。「パ・ルムがおっしゃるように、多くの人が『イスラーム国家』という用語にたいしてアレルギー反応を示しています。それと同様に、多くの人が『世俗化』という用語にアレルギー反応を示してきました」と書かれたところです。ただし、私が見たところ、その二つの間には違いもあります。「イスラーム国家」という用語にアレルギー反応を示すのは「名目上はイスラーム教徒でも」イスラームに共鳴しきれない人々であり、彼らのある者たちは、「イスラーム国家」を密かに建設しようとする陰謀が存在するのではないかという疑念を抱いています。それにたいして、「世俗化」にアレルギー反応を示すのはイスラーム教徒自身です。あなたが「世俗化」という用語を今後使わないという結論に到達したことに私は大いに賛同します。たしかに、世俗化と世俗主義を区別せよというのは、無理であるか困難であるというものです。また一方で、私の論説を正しく読めば、それが、現在のわが国で「イスラーム国家」という用語はむやみに使うべきではないという忠告を行うものであることがわかるでしょう。

いずれにしても、あなたが私に宛てた手紙について私は歓迎し、感謝します。あなたと私との間にはこれで接点

できました。私が誤って理解しているのでなければ、あなたはナシール氏にも親近感を抱いているようです。ナシール氏の発言についての考察など、あなたがお手紙に書いたことからそのように推察することができます。さらに私は、あなたがどうやらナシール以外のさまざまな私の友人たちとも良好な関係を築いていることを確かめました。私たち「ナシールと私」の間には、時々ないしはしばしば、見解の相違が生じます。あなたが結論を出しているように、シャフリルという人物にたいするナシールと私の態度の違いなどもそのひとつです。

いずれにせよ、私自身はいつのときも、シャフリルよりはナシールを身近に感じてきました。シャフリルとナシールの関係についていえば、シャフリルはとくにナシールの奥方と近い親戚筋にあるようでした。その憶測は実際に当たっていたようです。あなたはご存知ないかもしれませんが、社会主義者の人々は、私とはあからさまに距離を置く一方、ナシールにはとても大きな共感を示していました。もしイスラームを通じてもたらされる絆が十分に強いものでなかったならば、ナシールと私との距離は広がる一方であつたでしょう。そして、おそらくその点こそが、スキマン博士やユスフ・ウイビソノ氏がナシールをあまり好きではなかった理由です。彼らはナシールを、シャフリルや社会党の人々に強い影響を受けた人物として見ていました。それが、私が多少なりとも経験し、知っている政治というものです。しかし、そのような状態がずっと続いたわけではありません。スカルノ政権の刑務所のおかげで彼ら「社会党の人々」と私たちは共に過ごし、互いを別の立場から見直すことを学びました。その結果、新たなと言ってもよい、お互いを尊重しあう空気が生まれました。

もしかするとあなたは、『モハマッド・ルムの七〇年』という書物をすでにお読みになったかもしれません。私は、スバディオやアナック・アグンのような社会主義者がそこで私に敬意を示してくれているのを読んで、とてもうれしく思いました。社会党の人々に大きな影響を受けたことで知られるコーネル大学のケーヒン教授にいたっては、私自

身が評価しきれていなかった会議や会談の場における私の役割について、とてもすばらしい見方を示してくれました。外交官としての私の役割については、むろんシャフリルや彼の仲間たちは別の見解を抱いていたわけですが。

そのように、私自身の周囲でもさまざまな立場の相違が存在してきたとはいえ、いま独立三〇年以上を経た愛する共和国のために、皆で力をあわせて闘ってきた事実もまた疑いのないことなのです。私が見て思うに、その点は決して瑣末に評価すべきではありません。私は、あなたがすでに私と近い関係にあることから、あなたは、私と共に闘った人々とも近い関係にあると考えるところですが、どうかそれが外的外れではありませんように。見解の相違があれども、それは神からの恵みです。アメリカ人が「反論を述べる権利」と言ったような場合の、バラバラな方向をむいた相違ではなく、皆で力を合わせて真理に近づくための見解の相違なのです。私はここに「神の恩寵」の意味を見出せるような気がします。

いまの私の体力からすると、この手紙はすでに長くなりすぎました。あなたは私に賛辞を送ってくれましたが、このところは返答せずにおきましょう。私だって人間ですから、自分の力で勝ち得た賞賛を受け取るのはうれいものです。しかし、そこに長くどまっているわけにもまいりません。

神のご加護とお導きがありますように。

親愛をこめて

五 ヌルホリス・マジッド「私はパ・ルムに嫉妬します」

一九八三年五月九日

モハマッド・ルム様

テウク・チック・デイトロ通り五八番

中央ジャカルタ、インドネシア

平安あれ。

親愛なるパ・ルム

去る三月二九日付で、パ・ルムが自らのご意志で私にお返事をくださったことについてお礼を申し上げます。に、私から最大限の尊敬の気持ちをお伝えします。この手紙で私は、私が重要だと考える点をあげながら、パ・ルムのお返事をふり返りたいと思います。

まず、いまより一三年ほど前にバンドンのアデイ・サソノのもとで編集されていた『ミンバル・デモクラシ』誌のパ・ルムの文章については、申し上げるまでもなく、私や仲間たちはそれを存じていましたし、非常に強力な道徳的支持を受けた気持ちでございました。パ・ルムがおっしゃるように、『MD』『ミンバル・デモクラシ』の略称』のあの文章は、イスラーム学生連盟の執行部の事務所があったデイボネゴロ通りの一六番地でパ・ルムが私に握手してく

ださったことよりも、ずっと大きな意味をもっています。しかし、その意味の大きさはさておいて、先の手紙で握手のことを書き、『MD』誌のパ・ルムの文章について触れなかったのは、単に私のなかでパ・ルムのおふるまいが強く印象に残っていたためです。

パ・ルムのお手紙を拝読したあと、私は少しパ・ルムにたいして申し訳ない気持ちになりました。なぜなら、パ・ルムはご自身から進んで私たちに、「ようこそ。そしてがんばってください」とおっしゃってくださいだったので、私たちが行ってきたことといえば、ご指摘されるように、目標とするところにはまだ遥かに及ばないからです。その理由の一部については先の手紙で述べました。しかし実をいえば、私たち、とくにこの私は、多くの人から自分の肩に担わされた責任の重さにたじろいで立ち往生していたというのが事実です。一九七〇年一月に構想を立ち上げたとき、私たちの主たる意図は——個人的にはいまのインドネシアがイスラーム思想の刷新を非常に必要としているという確信を抱いてはおりましたが——実際にはひとつの推論的思考を示すだけでありました。誰がその刷新の事業を行うのかについては、能力があれば誰でもよいと思っており、必ずしも私たちでなくてはならないとは考えておりませんでした。しかし、その推論的思考を投げかけたのは私たちであり、したがって私たちが自身を刷新を行おうとしている、あるいは行うべきであるという見方が社会に生じたのはきわめて当然のことでした。

どうやらそうした社会的な責任負担は避けられないことであり、私たちも、願わくば避けずにいたいところでした。しかしながら、釈明すると、私は一九七〇年の初頭に書いた論文ですでに次のようなことを強調しております。人の活動の分業化が進み、社会の成員の役割分担がほとんど絶対的に規範化したこの近現代においては、宗教・社会・国家思想の分野を含めたいかなる分野の改革においても、一個人の肩にすべての負担がかかるということはありえず、集団的な取り組みがあつてしかるべきである、と。それゆえ、やがてウトモ・ダナンジャジャ編集の本に組み込まれ

ることになるその論文で、私は、若いイスラーム知識人たちが最も多く集まるイスラーム学生連盟やイスラーム学徒同盟 (PII) イスラーム学生協会 (Parsami) やイスラーム青年行動同盟 (GPI) のような組織にたいして、必ずしも組織的・公的である必要はないし、それはできることでもないのが、個人単位で道を開拓するようにと訴え、後押ししました。その訴えで意図したことがなぜこれまで実現せずに来たのかという点については、ここに書くのが憚れるような諸事情が存在します。

当初から私たちが気づいていたのは、その刷新の事業には、アカデミックな方面の補強と学術的装備が不可欠だということでした。ひとつの批判として、ラシディ氏からは、私たちが哲学を学んでいないと指摘されました。本当はそのようなことはなく、私などでも最初から哲学に興味を持ちそれを学んでいたのですが、その点を重視する「ラシディ氏の」態度と指摘そのものは全く正しいといえました。しかしまた実際には、必要なのは哲学だけではありませんでした。ある角度からみると、哲学よりもっと必要だといえるものがありました。それは、あの豊かなイスラーム古典の知的財産についての知見です。知見という言葉とともに私が意図するのは、現在多くのイスラーム教徒がそうしてしまっているように、外部にたいする護教の材料にするために、あるいは過去の栄光を誇るために、それをざつくり知るということではありません。それではあまりに本来的な用途からかけ離れています。私が考える知識とは、一四世紀間もの歴史のなかで展開した知的成長の動態をきちんと把握したうえで知識であり、それは実際、単純に身につくものではありません。しかし、まさにその知的遺産のなかでこそ、哲学もヘレニスティックな知的伝統の「イスラーム化」のさまざまな形態も汲み取られるのです。パ・ルム、成功するか否かは別の問題として、それは私が行おうとしていることなのです。

いま述べたことがなぜそれほど重要なのか。それは、事実として、何も存在しないところから思想を發展させるこ

とはできないからです。イスラームの近代主義者にたいするひとつの批判として、彼らの一部は常に、あたかも偉大で強固な思想がいまここで初めて作られたかのように考え、伝統的な知的財産に目を向けたい傾向があります。イスラームの古典にきわめて精通した学者であるファズル・ラフマン博士は、イスラーム近代主義者の間に知的貧困の兆しがあることをくり返し指摘しています。ラフマン博士が言うには、その知的貧困は、彼らが伝統的なイスラームの知的財産の継承を拒んできたことの結果であり、彼らの見識が将来の諸問題に対応するには不十分であることを指し示すものです。それは、現状の囚われの身になる危険を含んだ状況であり、それによってもたらされる視野の狭窄は、断定的で熱狂的な態度を生み出すことにもなるでしょう。おそらく適切とはいえない用語をあえてあてはめると、それは「原理主義（ファンダメンタリズム）」としてこれまで目にされている現象だといえます。

こうは言うものの、私は、有力な思想や革新的な思想は、なんの手を加えることもなく、もとのかたちのまま過去の遺産を継承したものでなくてはならないと主張しているわけではありません。過去への理解は現在を考える材料を豊かにするために必要ですが、むしろ私たちを縛りつけるものであってはなりません。むしろ、創造的に将来への見通しをたてる能力というのは、トーマス・S・クーンが学問の諸革命を通じて証明したように、通常は既存のパラダイムにさほど縛られない人々によって有されるものです。それは、異常な現象を感じする力を高めてくれる能力でもあります。したがって、アカデミックな補強や学術的装備が重要だと認識しつつも、理想を実現するために私たちは、願わくば完璧に装備が整うのを待つことのないようにしたいものです。パ・ルムも同意してくださると思いますが、完璧主義は得ではなく損をもたらします。また、私たちの宗教の基本的な教えは、人間は完璧な存在ではないというところに始まります。重要なのは、各自の力にに応じて可能なかぎり善き行いを行うことであり、その行動力を削ぎ落とすような完璧主義は避けなくてはなりません。条件にしばられて目的を見失うことのないようにしたいものです。

「準備万端で意気込んで海を渡ろうとしたら、海岸の縁で波にのまれた」とアラブの格言で描かれるがごとくになつてはなりません。

パ・ルムは、私がすでに『モハマッド・ルムの七〇年』を読んだかとお尋ねになりました。ありがたいことに読ませていただきましたし、所有もしております。スバデオやアナック・アグン、その他の社会主義者たちがパ・ルムについてとても好意的に書いているのを読んだパ・ルムご自身のお喜びも理解できます。しかし、私や仲間たちの喜びはそれ以上であったかもしれません。なぜだと思われませんか？なぜならば、あのパ・ルムの御本は、パ・ルムのような歴史的人物の開かれた精神、包容力ある精神を明瞭に映し出すものであったからです。これこそが、私たちが引き継ぎ発展させたいと願う思想のある側面を示すものでした。実をいえば、その重要な御本を読んで、私はパ・ルムに嫉妬さえも覚えました。なぜならパ・ルムは、異なる人々が相手でも心開いて付き合い、なおかつその両者はお互いを尊重するかたちで向き合えていらつしやるからです。それでいて、一部の「偏狭な」イスラーム教徒から誹謗中傷を受けたり、疑いを抱かれたりするということもありません。

それと大違いなのが、あのうんざりとさせる十数年前の私の経験です。一九六八年に、ロシハン・アンワルとモフタル・ルビス³の両氏は、それぞれの主宰する日刊紙を使って世俗化の運動の道を開こうとしていました。当時の私はまだ、世俗化は世俗主義や西洋主義と切り離しえないものであるとみていたため、ペンをとって彼らの考えに對抗する文章を書きました。その私の文章は、「近代化は西洋化ではなく合理化である」というタイトルのもので、やはり『ミンバル・デモクラシ』誌に掲載されました。何人かのイスラーム系の著名人は私の書いたものを支持してくれましたが、他方で、かなり驚くべきことに、私がマシユミと関係の深い社会党系の人々と袂を分とうとしていると懸念する声がありました。一九七〇年の初頭に私たちが自らの構想を世に伝えてからは、状況はいっそう混乱したものとなり

ました。あるイスラーム系の著名人は、私たちが社会党に操られていると激しく告発しました。そのひとつの「証拠」が、私たちの構想についての私の原稿が、モフタル・ルビス氏の発行する『インドネシア・ラヤ日曜版』に丸ごと掲載されたということでした。ですから、私にたいするこれらの憶測にすべて従うとつまり、私は社会党の人々に対抗してもいけないし、彼らと手を組むのもいけないということになります。

そうしたあやふやで一貫性のない評価はとても迷惑であり、危険です。これが生じるひとつの原因は、以前のお手紙で書かせていただいた知的考慮の欠如にあると私は思います。高い教育を受けた人々であっても、知的考慮を欠いていれば、あやふやなところに帰着します。私が正しいと感じるのは、他者に寛容で、多元主義的で、心開かれた、パ・ルムが示されるような態度であり、それが七〇歳を記念した御本に映し出されていたのです。同様の態度は、多かれ少なかれ、パ・ナシール、カスマン氏、ブヤ・ハムカ、ユスフ・ウイビソノ氏などの方々の七〇歳記念本にも見受けられます。望まれるのは、偶然や恣意性ではなく、深い審議や熟考の結果として生まれる健全な態度なのだと思いをもちたいです。

ケーヒン博士についても同じことが言えます。私は、パ・ルムの七〇年というあの御本に彼がきわめて有益な論文を寄稿したことをパ・ルムとともに喜びます。私はまた、個人的に彼に共感を抱いています。マシユミの人々についての彼の評価のしかたは興味深いと思います。たとえば、パ・ナシールやその仲間たちの「翼（思想的立場）」について

2 ロシアン・アンワルは、一九二二年、西スマトラ生まれのジャーナリスト。二〇一一年没。

3 モフタル・ルビスは、一九二二年、西スマトラ生まれのジャーナリスト。小説家としても活躍。体制に批判的な日刊紙『インドネシア・ラヤ』を主宰した。二〇〇四年没。

4 イスラーム思想の刷新を訴える以前のヌルホリスは、まだ保守的な考え方を維持するイスラーム近代主義者であった。彼が議長を務めたイスラーム学生連盟も、もとは「マシユミ系」の学生活動組織として知られる組織であった。

いてケーヒンは、近代的で西洋化されたイスラーム集団という区分けを行うだけでなく、さらに社会主義者で「左翼」であるとも述べています。そうした評価をケーヒンが行うのには確かな理由があるのでしょう。パ・ルムは、スキマン氏やユスフ・ウイビソノ氏が、パ・ナシールは社会党の人々、とりわけシャフリル個人の影響を受けすぎているとして彼を好まなかったと書かれました。その話はインドネシアの政治界では「公然の秘密」であつたかと思いますが、私は、シカゴ大学のロバート・J・メイヤーズがインドネシア社会党を考察した博士論文において、シャフリルがわが国の政治界を、ナシヨナリスト、共産主義者、そして「社会党とそれによつて牽引されたマシユミ、パルクンド、カトリック党」という三つの類型に分けたという話にいつそうの関心を抱きます。メイヤーズは、社会党が自らの政治目的のためにマシユミを利用したといったことや、彼らがいかに議会で第三の政治勢力のブレイン・トラストとしてふるまつたかについても書いています。

お手紙のなかでパ・ルムは、ナシール夫人がシャフリルの親戚であつたため、パ・ナシールはシャフリルと親密であつたのではないかという推測を述べられています。そしてその推測は正しかつたとも。これについては、親戚関係という要素のほかにも、種族的なつながりをほめかす説もありました。しかし私はその仮説は価値のないものと考えます。なぜならパ・ナシールほど偉大で才幹のある人物がまだ種族主義的要素を秤にかけることがあるなどというのは腑に落ちないことであるからです。ましてやイデオロギーの領域に種族主義的な要素が影響を与えていたなどということは、彼についてはありえないことです。もちろん、前述のメイヤーズの論文を読むと、シャフリルが(パ・ナシールを通じて)マシユミを「わがものにする」ことに成功したという印象を拭うことはなかなか容易ではなさそうです。そこで、パ・ナシールは本当にシャフリルに付き従つていたのかという疑問が生じます。私自身は、パ・ルムと同様、パ・ナシールはシャフリルの政治的見識に付従してはいたのではなく、「協働」していただけなのだと思測し

ています。付従ではなく協働という言葉を使うことによって私が意図するのは、相互の責任と賛同において形成される共通のプラットフォーム（カリマティ・サワ）を足場とした積極的な参加の態度です。実際にそうであったとすれば、まさにそれこそが、現在の私たちの間でも育んでいくべきものではないでしょうか。現在のわが国民の状況を考慮すると、インクルーシブでポジティブなその態度は、絶対に必要とされるもののひとつであると思います。

パ・ルムの七〇歳記念の御本の話に戻りますと、（誰にたいしても開かれた）その基本的な考え方に私たちは真に喜びの気持ちを抱くのです。誕生日の記念に作られる御尊老がたの御本は、もちろんイデオロギーの説述とは異なる性格をもつものですが、明らかに、興味深い研究の材料となる特定の見識をあらわすものとなっています。

パ・ルム、これがパ・ルムのお返事を読んで私が考えたことです。再び申しますが、私は一刻も早く祖国に戻りたい気持ちです。そのような気持ちにさせる最大の理由は、パ・ルムご本人をはじめとして、四五年世代の方々との対話の機会を得たいという願望です。これまで存在した対話よりも抜本的な内容を含んだ直接の対話を開くことによって、潤沢で溢れ出るパ・ルムの人生経験の井戸から多くの水を汲み出せるのではないかと想像します。そこで得られたものは、遠い将来を見る目を肥やし、鋭く磨いてくれるものであるに違いありません。

スカルノ時代の国民建設（ネーション・ビルディング）のあとに、スハルトの時代の経済開発が続いています。次の段階としてわが祖国は、民主主義的な形態をとにした政治社会の真の発展を進める努力を必要としていると思います。それは、これまでの段階よりもはるかに困難で複雑な段階であるに違いなく、当然、できるだけ多数の国民の参加を必要とします。私たちはそれぞれ、その地位のいかんにかかわりなく、なんらかの寄与を求められていると感

5 ナシールはソロク、シャフリルはバダント、ともに西スマトラ州の出身で、ミナンカバウ語を土着言語とするミナンカバウ人であった。

じます。たとえていえば、理想とされる民主主義の宮殿を建設するための煉瓦のひとつのような寄与さえも求められているのです。最も価値ある寄与のひとつは、何事にもインクルーシブな（もちろん、排他的ではないという意味です）態度、多元主義的な態度、パ・ルムによって示されるような開かれた態度であり、それらが民主主義の支柱を形成します。私にとってひとつの悲嘆の要素となっているのは、私たち若い世代の多くが、パ・ルムのような人物をはじめ、かつての世代の人々によって実践されていた民主主義的な態度を見たり感じたりする経験をこれまであまりしていないという事実です。

以前、私は、パ・ルムに宛てた私の手紙を複写して、祖国やこのアメリカにいる友人たちに送りたいとお伝えしました。ご推察できると思いますが、聞いた話によりますと、複写は複写を重ねられ、いまではすっかり広く出回っているとのこと。というわけで、この小さな対話をつなぎ足すために、私は今回いただいたパ・ルムのお返事と、そのお返しとなるこの私の手紙をやはり複写して一部の友人に送りたいと思います。

どうかアッラーが私たちを来世の幸せにつながる正しい道にお導きになりますように。万物はあまねく神のもとに。パ・ルムのすべてのお心遣いに感謝いたします。どうかなるべく早く祖国でお会いしたいものです。
平安あれ。

誠意をこめて

ヌルホリス・マジッド

六 モハマッド・ルム「社会党の友たちの幻想」

平安あれ。

ジャカルタ、一九八三年六月七日

親愛なるスルホリス・マジッド君

私はとてもうれしく思います。ナシールとスタン・シャフリルの関係についてのあなたの分析は的確です。つまり、ナシールはシャフリルに付き従っていたのではなく、プラットフォームの共有者としてシャフリルと協働していたという点です。残念なのは、シャフリル自身は、そのナシールの態度をあまり理解しておらず、敬意を払ってもいなかったということです。私はこの点は、「政治的礼節」あるいは政治的誠実さの観点から読み解かれるものではないかという気がします。

インドネシア独立革命の最初のひと月までをふり返ってみましょう。スカルノ大統領によって率いられた大統領指導の最初の内閣は四ヶ月しか続きませんでした。この点について私は、事実の説明を正しく行える立場にあるかも知れません。

スカルノ、ハッタほか、独立準備調査会に名を連ねた人々は、三年と五ヶ月の間、日本と「協力」することによつて、⁶日本軍政末期にインドネシア独立の準備を目的として作られた委員会。独立宣言草案や憲法草案を作り、審議する場であった。委員長はスカルノ、副委員長はハッタで、構成員もインドネシア人で占められていたが、日本軍の後見とともに成立した。

て祖国の独立を果たすことを考えてきました。その最後の時分、第二次世界大戦の動向が準備や予想をしていたのは異なるかたちとなったため、独立宣言は、拉致やその他の手段を通して実現することになりました。⁷ 日本は独立をインドネシアに委ねるのが遅すぎたのです。この動向に直面して、イスラーム教徒は当然、宗教から教訓を得ていました。「予定を立てるのは人間でも、その実現を定めるのは神である」と。信仰告白のようなこの言葉が、さほどイスラームへの信仰を強く表さないことで知られる人々によっても口にされるのを私は見ました。スバルジョ修士その人も、ある論説で英語の韻文を使って、「マン・プロポゼス、ゴッド・デイスポゼス」と書いていました。六五歳の誕生日を迎えたばかりのハルデイ修士もそのようなことを言っていました。

既存の刊行物のなかでは必ずしも言明されていない事柄ですが、スカルノもハッタも、彼らと行動をともしたほかの人々も、日本と「協力」して独立を果たすのだというある種の哲学をともに行動していたことは明らかです。この場合、シャプリルは異なる状況にありました。彼は、日本と「協力」しなくてはならないと考えるほど切羽詰まった心境にはなかったのです。

独立が宣言されると、空気はもう変わっており、日本との「協力」も終わりを告げていました。地下活動を行っていたというシャプリルは(その種の活動はもちろん報告されることもなく、記録されることもありません)、少なくともスカルノやハッタとは違うことを考えていました。

理解に難くないことですが、最初の数週間、いや数ヶ月間、スカルノとハッタの内閣は迷いを見せており、革命の空気が充満するなかで望まれるような機敏さを欠いていました。

話を短くすると次のようになります。スカルノとハッタの祝福を得て(百パーセントの喜びと熱意からの祝福ではなかったにせよ)シャプリルは首相に指名され、彼のもとで議会制民主主義が発動しました。

占領期に日本に仕えることに忙殺されなかったシャフリルは、私が思うに、独立後についてすでに多くの構想を練っていました。ハリム博士によると、彼はたしかに彼自身の手によって政治表明を作成し、それはハッタ副大統領によって調印されました。

そのシャフリルの政治表明こそが、インドネシア共和国の独立革命を再び可動状態にしました。その後オランダとの協議が進められましたが、そこではイギリスが間に入り、その国民気質に見合ったかたちで、二国間の対立を平和的解決に導くために働きかけるといふ重要な役割を果たしました。それが第二次大戦後の世界を覆っていた空気でもありました。

三つの内閣が成立するあいだ、シャフリルは変わらずその指導者の座にあり、マシユミも彼の政権に参加しました。そして時が経つほどシャフリルとマシユミの関わりは深くなっていきました。

当時、シャフリルが、成功した偉大な指導者と呼ばれる存在であったとしても、あなたが触れたように、そのことはすなわちマシユミが彼に付き従っていたということの意味しません。マシユミは、シャフリルが内閣の首班であること、彼が主導して種々の提案を行う立場にあることを認め、尊重していました。しかしそれは、シャフリル個人によつて何もかもが決定されていたということの意味しなないのです。

ここが、シャフリルや彼の仲間たちが考え違いをしていたところです。シャフリルは政権から退いたあとも、ただ彼らだけが国家を率いる能力があるというような印象をふりまいていました。

この部分との関連で、私は、あなたが紹介してくれたロバート・メイヤーズの博士論文に大いに興味をもちます。

7 日本の降伏が急であったため、スカルノやハッタは、事実と現状の確認に向かおうとし、独立宣言を保留した。しかし、血気盛んな青年グループが彼らを拉致し、直ちに独立宣言を行うよう訴えた。そうして八月一七日に独立宣言が行われた。

シャフリル本人が本当に、社会党こそが支配的で最も優秀だと言ったのでしょうか。自らの希望を実現するために他の政党を利用し、道具のように動かすことのできる政党であると言ったのでしょうか。

社会党にとつての苦い現実、一九五五年の総選挙で、小政党並みの得票率しか獲得できなかったこと⁸です。皮肉にも、その総選挙の計画を推し進めたのは、社会党指導者の一人、ルクマン・ウイリアディナタ修士であり、それとマシユミの指導者の一人、モハマッド・ルムでした。国民の選択はすでに明白であつたのに、社会党(その指導者一団)は、インドネシアの政界を支配しているのは依然として彼ら自身であると感じていたようです。それどころか、時として彼らは、知識人の世界をも彼らが支配しているという印象をふりまきさえしました。それは、大きな存在であり続けたいと願っている小集団の幻想であつたのではないのでしょうか。

あなたはロシアン・アンワルと私との間で行われた論争の記事を読んだことがあるかもしれませんが。その論争においてロシアン・アンワルは、一九三〇年代の政治の空には、ただいくつかの星が浮かんでいたにすぎないと語りました。ハッタ、シャフリル、そしてスカルノの名を彼はあげました(これがロシアン・アンワルの順位づけでした)。それから彼は、埋もれていた秘密を明かしました。スカルノは一九三三年にオランダ植民地政府の前に屈服の意を表したというのです。残された二つの星はいずれも社会主義者の星でした。ロシアンは、その最盛期にチヨクロアミノトとハジ・アグス・サリムによって率いられたイスラーム系の政治・社会運動についても語るのを忘れませんでした。その二人の指導者は「スカルノが植民地政府に屈服したというそのころ」すでに疲れてよれよれになっていたと彼は言いました。

ロバート・メイヤーズの博士論文は、たしかに非常に興味深いですが、それはシャフリル本人の言葉を聞き出したものなのでしょうか、それとも彼の賛同者たちの言葉なのでしょうか。その論文は、たとえば社会党の人々の幻想が語

られているだけであるにせよ、インドネシアにおいても読みたい人がたくさんいるように思います。私は、ただちにその本を一部送ってくれるように、あなたにお願いをいたします。

私は忘れてはいませんが、シヤフリルが首相になったとき、私は彼の政策を本当に尊重していました。社会党の指導者たちと同じ内閣で仕事をしていたときには愉快な思い出もあります。それらのことは、私が書いた『歴史著述集』の一卷と二巻などを読んでもらえばわかります。三巻は今月発行の予定であり、シヤフリルについて書いた文章も二つ含まれています。もし本当にシヤフリルがナシールを通してマシユミを「わがものにする」ことに成功したと発言しているのだとしたら、彼はなんと自らの足元を忘れてしまっていることでしょうか。種族的要素に関しては、私はナシールの態度により近い位置にいます。種族的要素や家族関係はまったく無視してよいものではありませんが、政治上の態度に反映されるべきではありません。反対に、政治的立場の相違が種族や家族の結びつきを壊してしまう事態も避けるべきです。私は、亡きハジ・アグス・サリムの人生からこのことを学びました。

あなたが手紙で名前をあげた指導者のなかで三人、見解の相違を理由にマシユミを脱退した人がいます。スキマン博士、アブ・ハニファ博士、そしてユスフ・ウイビソノ修士です。インドネシア共和国革命政府にたいするマシユミの態度をめぐるその見解の相違は生じました。マシユミはすでに、革命政府による決起行動は憲法に違反するという見方を示していました。しかしスカルノは、それよりも強く、マシユミが革命政府に参加する黨員たちを非難決議することを求めてきました。マシユミはそれに応じませんでした。なぜならその黨員たちはマシユミにたいして誤った行動をとっていたわけではないからです。仮にマシユミが「非難や懲罰のような」行動にでるのなら、それに先

8 一九五五年総選挙において社会党の得票率は、四大政党（国民党、マシユミ党、NU、共産党）が二〇%前後でしのぎを削るなか、わずかに二%にとどまった。

立つて(マシユミの規則に反しているかどうかの)調査を行わなくてはなりません。私たちがスカルノの要請に応じなかったために、スカルノはマシユミの解散を命じました。他方、社会党は、スミトロ・ジョジョハデイクスモを断罪し、党から除名しましたが、その決断は伏せられていました。そしてまもなく社会党も解散させられました。スミトロと社会党の仲間たちの関係は現在まで壊れたままです。

この場合、マシユミは正しい行動をとったことが証明されているような気がします。仮にマシユミが、ナシールやブルハン「ブルハヌディン」、シヤフルディンやその他のメンバーを非難していたら、むろん私たちの関係は壊れていたに違いありません。しかし私たちは正しい道を選びました。その代わりに政党は解散を命じられ、指導者たちは四年と四ヶ月刑務所に入るはめとなったわけですが。

いずれにしても、マシユミの元指導部は、もちろんあなたも知るように、みな現在まで昔のままの良好な関係にあり、ダーワ(宣教)の分野をはじめとして、その肩に課せられた仕事を続けることができます。私たちはそのことをありがたく感じています。

あなたに伝えておいたほうがよいと思うことをだいたい書き終えました。

最後に私は、あなたが海外での仕事を早く終えるための力を得て、愛する祖国で再会できることを祈っています。神のご加護とお導きがありますように。

敬具

追伸…ロバート・メイヤーズの博士論文をうずうずしながら待っています。

七 ヌルホリス・マジッド「パ・ナシールの役割は軽く見られるべきではない」

一九八三年六月二二日

モハマッド・ルム様

テウク・チック・デイトロ通り五八番

中央ジャカルタ、インドネシア

平安あれ

親愛なるパ・ルム

六月七日付のパ・ルムの二通目のお手紙が無事届きました。二度目の感謝の言葉を心より申し上げるとともに、私の返信にたいして再び返信をくださったパ・ルムのご厚意に最上の敬意を払います。このようなやりとりを通じてパ・ルムのような人物と対話を行う機会を与えてくださったアッラーに感謝する気持ちでいっぱいです。

マイヤーズの原稿を送ってほしいというパ・ルムの依頼を受けて（以前の手紙で私は彼の名をメイヤーズと誤った表記で書いてしまいました。申し訳ありません）、私は大いに喜びながら、この手紙といっしょにそれを送らせていただきます。マイヤーズの論文はまだタイプ打ちの状態のまま大学の図書館に保存されています。したがって、私が送らせていただくのはその複写です。

パ・ナシールとシャフリルの関係についての私の「推測」について、パ・ルムが同意してくださったのはありがたいことです。その「推測」は、実を言うとするに長いあいだ私のなかで芽生えていたものです。パ・ナシールといえば、最も偉大で近代主義的なイスラーム政党の指導者です。にもかかわらず、シャフリルとの関係を理由にその役割を過小評価する世間の傾向があり、私は心の奥でそれに同意できませんでした。そしてマイヤーズの論文はいっそう私の心に障るものとなりました。なぜなら、その(公式の)学術論文では、直接的にも間接的にもシャフリルが、社会党、マシユミ、パルキンド、カトリック教などインドネシアの特定の諸集団を支配していたと主張したことが明瞭なかつたで示されているからです。前回のお手紙でお伝えしたことを少し厳密に言い直しますと、シャフリルは、インドネシアの政治勢力を、とくに共産主義への態度の違いを基準に、三つの類型に分けたといえます。第一の類型は、インドネシア共産党をはじめとした共産主義勢力それ自体。第二は(前回の手紙で私はこれを第三の勢力と書きました)、インドネシア社会党、マシユミ、パルキンド、カトリック党。そして第三は、スカルノを柱にしたナシヨナリズム勢力です(マイヤーズ論文の八―二頁をご覧ください)。

マイヤーズは、シャフリル自身が第二の類型に入ること指摘するとともに、(一一頁で)社会党がそのグループの先導者として行動していたと述べています。この点は、私にとってはやや納得のいかないところですが、なぜなら、この政治勢力の類型化が、言われるとおり共産主義への態度を基準になされたものであるならば、実際により起こりうるのは、もとより反共産主義を鮮明にしていたマシユミが先導となることです。マシユミには宗教的な原点があり、社会党などよりも原理的、根本的に、共産党のようなマルクス主義勢力にたいしてアンチであるはずですが、それをふまえてもおシャフリルは、彼の主張を展開する根拠を持ち合わせていたのでしょうか。そして一二頁では、一九五五年までの社会党が「マシユミのようなムスリムの大政党との結びつきをおして、また議会で政治的専門家集団とし

て機能することをおして権勢をふるおうとした」と書かれています。社会党がインドネシアの政治思想において支配的な地位にあったという結論であることが明らかです。「わがものにする」という言葉はそこで使われていませんが、「先導」や「政治的専門家集団」という用語の使用は、「わがものにする」という言葉の印象と重なります。

もちろん、この論文の他所では、マシユミについて良いことも悪いこともたくさん書かれています。それが、私がパ・ルムに喜んでこの論文をお渡しする理由でもありません。読んで誤りが見つければ正していただけだと思います。直接的な当事者の一人であり、インドネシア共和国の初期にきわめて重要な役割を担ったパ・ルムによる評価は、高い信頼性を含むものであると確信しています。

パ・ルム、私はパ・ルムが正しいとおっしゃってくださいました私の「推測」を再び強調しておこうと思います。私の考えでは、パ・ナシールは、シャフリルの付従者ではなく、彼の構想への協働者でした。これは一見重要ではない言葉のあやの問題に見えますが、実際は深い含みをもちえます。「付従する」というのは、表と裏の関係で他人と相対すること、「協働する」というのは右・左の関係で他人と相対することと意味づけられます。したがって、パ・ナシールがシャフリルの政治構想に付従したのではなく協働したと私が言う場合、意図するのは、パ・ナシールが右・左に立場を違えて、あるいは同列の状態で、シャフリルと相対していたということであり、表と裏の関係ではなかったということですが（パ・ナシールが表でシャフリルが裏というなら、それはあったかもしれませんが）。

その「推測」は——パ・ルムの賛同を得たことで、ひとつの知識か確信に変わっています——私自身にとって二つの意義を持つものです。ひとつは心理的領域における意義、もうひとつは理念の領域における意義です。一つ目の意義は、先に触れたように、祖国で、そしてアメリカでもよく聞く評価、すなわちシャフリルに比べてパ・ナシールの役割を小さなものとみる評価によって私が悩まされてきたことと関係します。これは、人が完璧に近い理想像を心

に描いて心理的充足を得たがる傾向にも似ているかもしれませんが。ただし、ここには、私個人に関する少々感傷的な出来事が絡んでいます。私はかつて一九七六年にシカゴからパ・ナシール本人に手紙を書いて、その出来事をお話しましたことがあります。

一九七〇年代の初頭のことです。ジョンバンにいる私の母までもが、私がパ・ナシールの路線と決別したという報道に接しており、母はその報道にとても失望していました。あまりに失望が深かったため、母はいつも夜中に起きて、タハジュッドの礼拝を行い、私がとくにこの問題についてアッラーの導きを得られるように祈っていました。そして私がジョンバンに帰省したあるとき、母は悲しい顔をしながら私に問いかけました。「ヌル「ヌルホリスの愛称」、どうしてお前はパ・ナシールを怒らせるような騒動を起こしたのかい？あの方はインドネシアで最も優れた指導者だよ」——。私は、パ・ナシールとのことで騒動など起こしていないと答えました。それはマスコミの報道からの印象にすぎず、全部が正しいとは限らないということ。正確には私はパ・ナシールとは考えの相違があるが、それすらただいくつかの問題についてだけであること。認めなくてはならないこととして、その考えが相違する過程において、意図しようと思図しまいと個人的な事柄も絡んでしまい、相違がいつそう味の悪いものになってしまったということ。また、本当のところ、私たちの関係がどうなっているのかは確かめられていないということ。母にはこれらのことを説明しました。そして、その最後の点に関して、私はパ・ナシールに謝罪することを母に約束しました。私はその約束を、先ほど触れた一九七六年の手紙で、ほかの話題も交えながらですが果たしたわけです。

ところで、実際には、母の咎めを受けたとき、心中でつぶやいたものです。「パ・ナシールがインドネシアで最も優れた指導者だって？ならばパ・ナシールが、指導されていたとは言わないまでも、シャフリルの思想の影響を受けていたといわれるあの評価はいったい何なのだろう？」と。(ただ私は、そこを母に問う勇氣はありませんでした。)

なぜなら、母は、誠実で素朴な考えをもつマシュミの女性であり、その組織の指導者であるパ・ナシールが悪く言われれば気分を害するということがわかっていたからです。

母の失望と非難は、私の心に深い影を落としました。以来、私は延々と、パ・ナシールとシャフリルの関係の本質を知るための情報集めをするようになりました。非常に残念なことに、コーネル大学のジョージ・マクタン・ケーヒンの著作など既存の刊行物から情報を集めると、常に明快で腹藏がないわけではありませんが、たしかに政治の思想分野においては社会党がマシュミを凌駕しており、マシュミに多大な影響を与えたという印象がもたらされます。そして私はマイヤーズの論文に出会ったわけです。私はこの問題に常に敏感になっていたため、マイヤーズの説明はたどころに目に入りました。私はシャフリルの主張を受け入れることができなかつたのですが（潜在意識として母が正しいことを常に望んでいたのでしょう）、それを打ち消すための具体的な資料も持たなかつたので、せいぜい私にできることは、パ・ルムのように推論を立てることだけでした。そうしたところに、ありがたくもパ・ルムからお手紙をいただき、わずかな材料に拠るものでありながらも、具体的に権威をとまなうかたちで私の推論が正しいと認められました。これで私は大きな心の安らぎを得ることができました。

二つ目の意義、すなわち理念の領域における意義とは次のようなことです。前回の手紙でお話ししたように、私の「推測」が正しいものだとすれば、パ・ナシールによって示された政治的な態度こそはまさに継承し発展させていかねばならないものだと思えます。私にとつてその態度は、開かれた、ポジティブでインクルーシブな態度を示すものであり、それはすなわち、前回の手紙で申したように、インドネシア国民の発展のため、民主主義の理想を実現するためにきわめて必要とされている諸価値にあたるものであるからです。パ・ナシールがシャフリルに「付従」してい

9 戒律で決められた五度の礼拝以外に、任意で夜中に行われる礼拝のこと。

たと言われれば、私はただ「抗議する」のみです。しかし、私は、パ・ナシールがシャフリルに、あるいはほかの誰にたいしてであれ、共通の利益になる政治的理想と行動のために「協働」を行ったことを手放して支持します。換言すれば、プラットフォームを共有する人々と「協働」することは、お互いが正しく合法的と認める考えを実現しようとするということです。前回の手紙で私は、クルアーンの用語のひとつである「カリマティ・サワ」(等しい言葉)という用語を使用しました。イムラーン家の章「三章」の六四節で、アッラーは預言者ムハンマドに、ユダヤ教徒やキリスト教徒の人々にも、預言者と彼らの間の「等しい言葉」に来るよう呼びかけることを命じておられます。そしてもし彼らがそれを拒んだならば、私たちは自らが神に帰依した者であるという事実を強く訴え直すように神は命じています。

間違っていないとよいのですが、私はその章句の内容に関してアナロジ(喩えのキヤース)を見出しています。つまり、ユダヤ教徒やキリスト教徒のような異教徒と向き合う場合、純粋な意味での全能の神への忠誠として、私たちは彼らを共通のプラットフォームに誘うように命じられています。したがって私は、異なる考えを持つ政治集団との間にひとつの原則や構想を互いに認め合えるような共通のプラットフォームを探し発見することは、神によっても正しいと定められていることなのだと理解しています。これが、マシユミの指導者としても個人としても、私がパ・ナシールを評価するさいの観点であり、彼とシャフリルやその他の社会党の人々、さらにはインドネシアの民主制と立憲制を維持しようとするマシユミが接近し協力したほかの政治勢力、すなわちパルクインドとカトリック党(いずれも「政党」として)との関係を見るさいにも用いる観点です。

したがって、私の「推測」は、とくには社会主義者たちとの協働などいくつかの政治選択をめぐるパ・ナシールへの支持にもつながります。ちなみに、私のこの態度は突如生じたものではなく、徐々に形をなすように生じたものです。その態度は、たしかな根拠にもとづき、批判的検討を積んだ末のものでなくてはならないと考えていました。それゆ

え私は、先の手紙（四月二三日付）でパ・ルムが、パ・ナシールの考えについてのより包括的な私の観察を読んでくださったうえで、私がパ・ナシールに親近感を抱いているのではないかと書いてくださったことに意を得ておりました。

パ・ナシールの態度は、実際シャフリルが一人の偉大な思想家であったという事実を思い起こすことよってさらに正当化して見る事ができます。たとえば『わが闘争』など、彼の著作物や構想をたどると、西欧の彼の同志の誰もが認めるように、シャフリルが偉大な社会主義思想家であることを認めないわけにはいきません。それに私は、彼の多くの構想は、社会的公正をともにした民主主義社会の理想を述べたあたりなどくに、いまだわが国の発展のためには有効であると感じています。シャフルディン・プラウイラヌガラ氏も、イスラームと社会主義者の理想との関係を扱った冊子を出したことがあります。H・O・S・チョクロアミノトとアグス・サリムもまた行っていたように、「イスラームと社会主義の接合を論じた」同様の考察はほかにもあります。そのようなわけで、その政治構想が「マルクス主義者」であるシャフリルのような人物に由来するものであるとしても、そこにたしかなものがあるならば、私たちが共鳴するのは許されることであり、ハディースにおいてもそうしたものを拾い上げることが提案されていきます。つまりそれは、宗教的観点からも賞賛されるべきことなのです。

10 パ・ルムはお手紙のなかで、パ・ナシールのある態度について賛同すると述べられました。それは「種族的要素や以下の章句である。—— 言え。「啓典の民よ、われらとおまえたちの間の等しい言葉に來れ。すなわち、われらはアッラーのほかに仕えず、彼になにもを並び置かず、われらのある者がある者をアッラーをさしおいて主とすることはないと」。それでもし彼が背き去るなら、言え。「われらが帰依者（ムスリム）であることを証言せよ」（中田考監修『日亜対訳クルアーン』より）。

家族関係は無視してよいものではないが、政治上の態度に反映されるべきではない。政治的立場の相違が種族や家族の結びつきを壊してしまう事態も避けるべきである」と書かれたところです。このことについて私も意見を表したいと思います。第一に、どの種族や家系に生まれるかは明らかに私たちの選択ではなく、神が定めた宿命です。アッラーの定めであるがゆえ、私たちは従順でなくてはならず、起きたことはすべて最良であると考えなくてはなりません。種族の問題については、聖典においては、多様な民族や種族が存在するという事実は、お互いに知り合うべき、個別のアイデンティティが存在することの表れとして述べられています。それゆえ私は、人間の付き合いにおいて種族的要因を保護し、重視するのは、ある程度まで誤りではないと考えています。

一方、親族関係についてクルアーンでは、一族郎等親密な関係を保つことが明確な教えとして存在します。その教えは、ウル・アル・アルハム、シラ・アラハム、ウル・アル・クルバなどの「身内や親類をあらわすさまじまな」概念として表現されています。家族をめぐる教えはそれほど強力なものであり、親と良好な関係を保つことは、タウヒードの原則に絡めたアッラーから人間への命令（通達）であるということが夜行の章「一七章」の第二三節¹¹で明記されています。それどころかまったく不信仰者といえる親にたいしてであつても、クルアーンは変わらず良い関係を保つように命じています。ルクマーン章「三一章」の一五節には次のように書かれています。「だが、もし両（親）が、それについての知識がおまえにないものをわれに共同者たちとして配するようにおまえと奮闘（ジハード）するならば、両（親）に従ってはならない。だが、現世では両（親）に良識に則つて付き合え¹²」と。

したがって、家族生活が、良心と節度という私たちの宗教の基本的な教えと重なることは明らかであり、この場合、イデオロギーや信条、そして宗教が、その良心と節度を妨げることは避けなくてはなりません。だから、パ・ナシールやハジ・アグス・サリムのようにイスラーム教の諸原則に精通した人々が、パ・ルムがお話しされたような立

場をとることは不思議でもなんでもありません。むしろそうした方々が、生身の付き合いそれ自体（アンジツヒ）と主義やイデオロギーを分別しながら、あるいはその重要性を計りながら、家族生活がどうあるべきかの模範を示してくださったことを喜ぶべきでしょう。再びアナロジを用いて言いますと、先ほど引用したクルアーンの章句における「両親」とは、ほかの家族のメンバーにも適用できるものですし、この家族の関係性もまた、一般的な人と人との友好関係のあり方に拡大して適用できると私は思います。

いまお話ししたことは、以前のお手紙（四月二三日付）のなかでパ・ルムがお書きになったこととびつたり一致します。それは神の恵みをもたらす理解の相違について書かれたお言葉で、理解の相違があるからといってこの世でもに生活する私たちの生身の付き合いが否定されてはならないという部分です。ただ私は、マイヤーズを含めた多くの外国人研究者がなぜ、特定の集団の指導者が同じ種族や地方の出身者であるという事実を強調するのか、不思議に思います。私から見ると、そのような見方はまったく適切ではないか、それほど適切ではありません。私は以前の手紙で、そうした指標は価値を持たないとも書きました。もしそれがたしかに価値あるものだとするならば、マシユミの知識人指導者層のなかにサンスクリット語の名前の方が多くいることはどう説明されるのでしょうか。スキマン・ウイルヨサンヨヨ、カスマン・シンゴダイメジョ、プラウオト・マンクスサミト、シャフルディン・プラウイラヌガラ、ユスフ・ウイビソノ、A・W・スジヨソ、デイボルワルジョなど、ほかにもたくさんいます。こうした理屈からも

11 以下の章句——そしてお前の主は定め給うた、彼のほかに仕えてはならない、と。そして、両親には心尽くしを。もし彼らの片方か両方がお前の許で高齢に達したとしても、彼らには「ふつ（忌々しい）」と言ってはならず、彼らに声を荒げてはならない。むしろ彼らには優しい言い回しで話せ。

12 このヌルホリスの手紙では原典のアラビア語のみ記されている。彼の書簡におけるクルアーンの引用（アラビア語）は、他の箇所ではすべてインドネシア語の訳文が付されている。

「種族的要素の強調は」適切ではないと私は言いたいです。

話を戻しますと、私は、理解の相違は単なる相違ではなく、皆で真理を見つげるための努力や生身の付き合いの継続を後押ししてくれる神の恩寵であるうというパ・ルムのご主張に感銘を受けております。多くの人は、人生経験が足りないか、澄んだ心で考えようとする気持ちをもてないでいるために、このことをあまりよく理解していません(正直に申せば、かつて私自身もそこに含まれました)。私は以前、制憲議会や共和国革命政府樹立の問題の場で「イスラーム国家」を持ち出すようになったマシユミについて理解し難い面があると手紙で主張しましたが、それもこの「健全な理解の相違」として捉えるべきことであつたかもしれません。ただしこの点については、以前手紙に書きましたように、このシカゴで私は多少なりともその説明となるいくつかの情報を得てきました。ここで私は、まだ触れていないさらなる情報源についてもお伝えします。それは、アフマッド・シャファイ・マアリフ氏の博士論文で、制憲議会における「イスラーム国家」の構想について非常に重要な考察を行っています。その博士論文はたいへん興味深い内容なので、パ・ルムには、カランマランにあるジョクジャカルタ教育大学社会学部のシャファイ君に連絡を取って、彼の博士論文を入手されることをお勧めします。ぜひご覧になってください。

私は、私が見ただけのマシユミと意見を違えているばかりであるような印象をもたれることを望んでおりません。重要な理解の相違が存在することはたしかですが、逆に理解を共有している点も主張しておかねばなりません。ここで私ごとりあげたいのは、パ・ルムがお手紙のなかで書かれた「政治的礼節」もしくは政治的な誠実さの問題です。偶然にも、最初にお送りした手紙のなかで、私も、政治における倫理的な教えの源泉としてイスラームを位置づけることを提案しておりました。倫理は礼節よりもずっと幅広い問題にかかりますが、礼節とはそもそもイスラームの倫理上の教えへの理解と馴染によって保証されるものです。私の信条によると、イスラームの倫理上の教えとは、イスラーム

の神学、そして終末の日を明確な現実として想起することによって最も強い力をもちうるものです。そして、以前の手紙で私は、たとえばアメリカが本質的にはキリスト教国家である（公式には世俗的民主主義国家であるにせよ）とパ・ナシールがおっしゃったことに賛同したわけですが、それは、ここでお話ししている倫理的な教えの観点からの賛同です。パーソンズやベラーなどの「宗教社会学の」専門家も、この国「アメリカ」がキリスト教プロテスタントの倫理とともに成り立っていると見ています。その倫理は、正確には、ワスプ（WASP・ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）のそれとして述べられるものです。

シカゴで友人たち、とりわけ帰国する前のシャファイ・マアリフ氏と頻繁に話をするなかで、私はよくわが国の一般と現実とに照らし合わせて倫理の問題を語るようになっていきました。人は当然のようにわが国民の倫理の基礎はパンチャシラにあると答えるでしょう。その意見は間違いではなく、私たちは、パンチャシラが建国のために同意された条項であることを思い出さなくてはなりません。しかし、実際のところ、パンチャシラで定められている倫理条項は、ただ公的で憲法的なレベルにおいて正しく、揺るぎないかたちで存在するものです。他方、現実の社会を見ると、民衆の側における生きた倫理というのはまったく（いまだ）ひとつに束ねられるものではなく、島々の奥にあるアニミズム的倫理から大都市の西欧文化の影響を受けた倫理まで多様性をもって存在しています。

しかしながら、広範で中心的な倫理観の源泉となるものもまた存在します。国民全般の倫理観の「酵母」となる可能性を強く秘め、パンチャシラという器に入れる材料となるものです。第一に、現に最も明確な形をとって稼働しているインドネシア国民の倫理とは、インドネシア語です。第二に、近代において私たちをあらしめる倫理、あるいは近代を導入した倫理は、残念なことではあります。植民地支配者たちによって、大部分は現在まで存続する学校制度を通してもたらされたものです。そして第三に、祖国全体に最も広範に行き渡った民衆の信仰としてのイスラーム

の倫理が存在します。専門家たちはその役割を、私たち民衆の側に芽生えた進歩的で近代的な諸価値を均すものとして捉えています。ここで諸価値としてとくに強調されるのは、人間の平等という価値(エガリタリアニズム)、個人の諸権利にたいする承認と尊重、規則や法律(シヤリーアの体系から直接導かれるもの)に従った生活理解、迷信よりも自由なヴェルターアンシヤアウン(世界観)などです。

いくつかの現実を見るに、これら三つの国民的倫理の要素を最も広く備えたインドネシア人の集団がマシュミ、とりわけ知識人指導者たちの生活に反映されるどころのマシュミであったと思います。なぜそう思うのかといえば、第一に、マシュミは、インドネシアの地域を最も広く覆った宗教であるイスラームの政党でした。第二に、これまでに存在した政党のなかでもマシュミは、祖国の隅から隅まで均等な支持者のアイデンティティとともに広がった政党でした。第三に、政党の規模が大きいということ以外に、マシュミの指導部は相対的に、最も多くてさまざまな地方や種族を代表するかたちで成っていました。第四に、マシュミは、その幾多もの政治表明や現実の表情において、明確に近代主義を受容したイスラーム政党でした。とりわけ、知識人指導者たちの近代主義の受容には、一般に近代(オランダ)教育を受けてきたという背景があります。

最も突出したマシュミの性質は、これまでも専門家たちの関心を集めてきたように、近代主義ムスリムの集団であるという性質です。この現実は今明らかに、たとえば彼ら個人や彼らの家庭において見られるような、マシュミの指導者たちの倫理観に映し出されています。(私はよくふざけて、以前のシャファイイ・マアリフ君や、いまのシカゴの友人たちに言います。マシュミの人々はイスラームの倫理と近代的倫理との間で板挟みになった存在であると。イスラームの倫理は——失礼ながら——彼らを背教の場所から遠ざけます。そして近代の倫理は、一夫多妻を肯定するキアイたちとは対比的に、彼らを一夫一妻の原則に忠節にします。)

私たちは、マシユミの人々全般（一部の地方に限らない）を覆うインドネシアらしきとイスラームの教えとの有機的な関係を説明することができます。同様に、私たちは、マシユミの人々の近代主義——歴史的事実として彼らはそれを植民地時代の教育を経て身につけたわけですが——とイスラームの諸原則との根本的なつながりを見つけることもできます。それゆえ、マシユミの人々の倫理は、全体的に、イスラームの倫理以外の何物でもないと言うことができます。結果として、もしインドネシアにアメリカのワスプの倫理に匹敵するものがなくてはならないとすれば——それほど間違っていないければよいのですが——それはおそらくマシユミの人々が有するような倫理であると思えますし、この場合、ワスプと異なるのは、それが人種主義的な含みを持たないということです。

私がここでマシユミについて語り続けているのは、古き時代のその政党の繁栄のノスタルジーに浸りたいからではありません。私が思うに、その政治倫理の問題の探究において、私たちはむしろ（プラウオト氏の言い方によれば）「自らを解体した」晩節のマシユミについて最もポジティブな諸側面を見つけることができます。あのマシユミの解散自体は私の関心の的ではありませんでした。私が思いを及ぼしたのは、その倫理がその後どう引き継がれていくかです。結果的にはその倫理の持続が、戦略的で根本的な結果をもたらし、長期的にも成果の見込まれることであると思われるからです。

私は、マシユミの知識人指導者たちの個人や家庭において近代主義イスラームの倫理がどのような形をとっているかの例をあげました（ピューリタンで、背教から遠く、単婚に忠節といった例です）。しかしそれらは単純で小さな例にすぎません。実際はもちろん、近代主義イスラームの倫理の表明は、マシユミの人々の社会的・政治的な闘争や考え方のなかに数多く見て取ることができます。歴史には、パ・ルムのようなマシユミの人々が高潔にいくつもの価値を守ってきたことが記されることでしょう。それらの価値とは、民主主義、基本的人権、法の秩序、立憲主義、清

廉な統治、個々の道徳、社会的正義、個人の権利、思想や表現の自由、報道の自由などいずれも「偶然にも」アメリカのワスプに見出されるものから人種主義的要素を取り除いたようなものです。そのマシユミの指導者たちの倫理の強固さこそが、マシユミに最も批判的な人々の目においてさえ、独自の性質や性格をもった指導者や政治家の姿として感銘を与えてきたのです。

マシユミがその闘争において成功を収めたのか失敗したのかについては、見る人によって見解に相違があるようです。しかし、私が思うに、その相違というのは、実践的な政治の領域におけるマシユミの闘争をめぐるものなのです。まだ多くの人によって探究されていないのは、直接的にも間接的にも、その高い社会的・政治的な倫理を養成し維持してきたところに見られるマシユミの知識人指導者たちの闘いです。現在に至るまで、私はその問題についての真剣な考察を見たり聞いたりしたことがありません。

その倫理的・哲学的領域についていえば、おそらく人はマシユミの知識人たちが敗北したなどと言うことはできないでしょう。少なくとも言えるのは、もし人が、国民の将来にとって今後も有用なマシユミの人々の高潔な倫理的諸側面に気がつかないのだとすれば、それは憂慮すべきことだということです。そして、そのマシユミの知識人の主だった人々がまだ私たちと同じ社会に身を置く間に、この点は主張していく意義があります。社会にとって必要なくつもの確約を得るために。

私は、マシユミの知識人たちの経験は、インドネシアの将来にとって、社会的・政治的倫理を形成するさいに掘る金坑となりうるものと見ています。もしその倫理を掘り出し発展させることができたならば、そして若い世代の国民の間に、発展途上国でありがちな感情的・政治的な扇動をぬきに、滑らかで適切、かつ自然な方法で、肥沃に植え付けることができたならばどうでしょうか。アメリカ合衆国がワスプの倫理によって支えられているように、インド

ネシアが健全で強固な倫理観によって真に支えられるようになることもありえるはずですが、そうなれば私たちは、パ・ナシールがアメリカ合衆国を「キリスト教徒の国」とみなしたのと同様の意味で、「ムスリムの国」としてインドネシアを見ることができるようになりません。

私はここで、現在こそがこの倫理の問題を社会に投げかけるための「決定的」な機会であると、あるいは少なくとも最良の機会であると言おうとしました。「決定的」であると言いたくなるのは、現実を見ると、パ・ルムやパ・ナシール、パ・シャフ「シャフルディン・ブラウイラヌガラ」その他の方々がご健在である現在が、高貴な政治的倫理を生きた例として見ることでできる機会であるからです（非常に残念なことに、ブン・ハッタは政治的倫理の金坑として最も豊穡な存在であったのに、亡くなってかなりの時間が経ちました。以前『コンパス』誌に掲載された回想によれば、あのお方は常にインドネシア国民の良心としてふるまい続けたように思われます）。

パ・ルムのお手紙に戻りますと、倫理的に充足した生き方の例は、反立憲的なインドネシア共和国革命政府の運動に加わった理由でパ・ナシール、パ・シャフ、パ・ブル「ブルハヌディン・ハラハップ」その他の人々をブン・カルノが解雇し非難したとき、マシユミの最末期のリーダーであったブラウオト氏やその仲間たちがブン・カルノの権に従わなかったという決断にも示されています。私は、パ・ルムは神のお導きに感謝する資格が本当におありだと思えます。なぜなら、仮にパ・ルムやお仲間たちが、ブン・カルノと同様に解雇や非難を行っていたとしたら、パ・ルムご自身が予想されたように、ウンマの分裂や困難がいつそうひどく引き起こされていたにちがいないからです。パ・ルムは、例としてスミトロ博士の問題を引き合いに出されました。社会党の指導部による彼の解雇や彼への非難は（パ・ルムはそれは秘密裏のものだとおっしゃいました）、彼らの組織に亀裂を残しました。（それから私は、新秩序の初期に、知識人や政治の墮落をめぐって彼らがお互いに論争をやめなかったのを思い出しました。誰が正しいの

か私にはわかりませんが、それはまことに残念な出来事でした。そして仮にマシユミの指導部が共和国革命政府に関わった仲間たちを解雇し非難していたならば、政治の実践領域においても倫理的・哲学的領域においてもマシユミの物語はそこで終わりを告げたことでしょう。そして、健全な政治文化を打ち立てるための最後の闘いも大きく根本的なかたちで壊滅したことでしょう。ありがたいことに、そのようにはなりませんでした。

私は、とりわけ私たち自身を含めたすべての人が、いまはマシユミからポジティブな教訓を得て、反対に社会党から、絶縁しあい、罵り合う政治文化というネガティブな教訓を得られると思います。これによってまた、現在ますます重要となっている先ほどの倫理の問題を語る機会が訪れます。なぜなら、どうやら現在のわが国では、非常に破壊的な政治文化が根を広げつつあるからです。私たちは遠くの他人を見る必要がありません。イスラームというつながりから、現在の開発統一党(BPD)¹³に目をやるだけで十分です。まさにこの政党は、わが国の政治劇場で「耽溺させる」見世物となっています。私はそれ以上具体的な評価を行いません。しかし開発統一党の状況は日に日に「救いようのない」ものとなっているようです。

一九七七年の総選挙で私は開発統一党を支持しており、それどころか、東ジャワのグス・ユスフの所などで選挙運動を手伝ってさえました。私はおおっぴらに、「かませ大」¹⁴である開発統一党を支持する理由を説明していません。その理由とは、複数の政治勢力間の力関係を均衡に近づけ、現在政権を担う勢力にたいする代替勢力として成長させたいという、政治構造の変化を期待するものでした。私たちの願いは、選挙において「選ぶ」という行為の意味が具現化することで、民主主義の考えのひとつを実行する、すなわち醜聞なく平和的に国民が「政府を雇用(Hire)もしくは解雇(Hire)する」自由を実行できるようになるということでした。当時私は、開発統一党がそのような潜在的な力をもつ対抗勢力に育てば非常によいだろうと考えていたのです。(しかし、こちらのシカゴ大学のある授

業で、発展途上国の政治について議論しながらそのことに触れたとき、教授は私が幻想を抱いていると言いました。

開発統一党が対抗勢力として成長するという期待は現在失われつつあります。諸勢力が均衡に近づくという政治システムの理想の実現可能性もどんどん低いものとなっています。社会学・政治学の多くの理論を用いてもそれらの傾向が指摘できません。インドネシア民主党 (PDI)¹⁵ も同様ですが、私が開発統一党をみて非常に残念に思うのは、結局はやはり、仲間内での縁の切り合い、罵り合い、非難のしあいという政治的な癌に侵されてしまっているということです。かつて開発統一党は、NU「という大組織」が中軸勢力となっていたことからそういう病気に侵されにくいものと思われていました。しかしいま、その見方はまったくの幻想にすぎなかったことがわかります。きわめて危険なその政治的な癌はいま、健康だった身体の部位にも及び、ぶつぶつと広がり始めているようです。

彼らの一部——むろん全部ではありません——はずでにあるべき理想を失っており、どうすれば「安全」で現在の地位を保てるのかを探りながら己の正当化に精を出しているという印象が強くなります。彼らの政党や彼らが得た個人的な地位は、あたかも彼ら自身の「田畑」や「店舗」であるかのようです。

彼らに関する報道を読みますと、彼らのすべての行動や画策は、同僚や他人が自分の地位を脅かし、奪い取ろうとしているという心配や不安、疑いの雰囲気に含まれながら、それでも自分の地位を守り抜こうとするものであるとい

13 開発統一党は、一九七三年に、スハルト政権の強権的政治体制の構築の一環として、当時存在していたイスラーム系の諸政党が統合されるかたちで生まれた。

14 スハルト政権にとって開発統一党は、民主制度の体裁を維持するために存在するものであり、同党の選挙での位置づけは常に、「与党」ゴルカルの勝利の引き立て役であった。

15 民主党も、一九七三年、スハルト政権によって複数政党が統合されて生まれた政党。国民党のほか、クリスチャン党やカトリック党など非イスラーム系政党がひとつにまとめられた。

う印象から免れません。遠目に見ると、彼らは同僚や他人とそれぞれお互いに三脚を立てて向き合っているようです。もしそのような政治的な病が年配の世代にのみ広がっているものならば、「ほうっておこう。もうすぐ彼らはいなくなる」と言つて、私たちは自らを慰めることができるでしょう。しかし、その悪しき実践が若い世代に継承されることがあるならば——実際すでに継承され始めているようですが——それはどう乗り越えてよいのかわからない厄災だといえます。

もしかすると、ウンマの側では、具体的にどのようなものであるのかはともかく、不適任な政治家候補を濾過し、イスラームの倫理的条件を満たさない彼らをハディース学の選別の方法を借用して排除する機関があつてしかるべきかもしれません。個人の道徳レベルが高い(ピューリタンで背教者でない)人々、ただ自分の利益のために政治的な搾取を行う日和見主義者や浮遊者でない人々を選ぶことも同時にできる機関です。私たちは、とりわけ選挙に関連したところで国家の政治の仕組みを描きななおすべきかもしれません。それによつて、ただ人に「安全」を求めて行動させるようなメカニズムに終止符を打つような仕組みです。私は、地方選挙についてのプラウオト氏の構想を思い出します。それは、政治家は、比例代表制のもとで政党が選ぶのではなく、選挙民が直接選ぶようにするという構想です。比例代表制こそ、政治家(候補)の独立や自立を妨げ、政党指導部——ときには政府関連の者たち——のなすがままの道具となるような数々の政治操作を生むものであり、彼らを依存的な、つながれていなければ何もできない存在としています。プラウオト氏は正しかったと私は思います。

しかし私はここで一般化や十把一絡げを望みません。正直に言つて、私たちは、開発統一党のなかには——誰であるかはさておいて——心を動かす誠実さや理想にたいする純粋さをもつ人々がいることを認めます。私たちは彼らに共感を示しますし、アッラーの援助や導きがあるように、そして彼らが勇敢で、忍耐強く、残された知性を守り通せ

るように、祈りを捧げたいと思います。彼らは私たちの希望であり、私たちは、パ・ルムやそのお仲間のような人々が例を示してくださった政治の倫理を打ち立てるための仕事を託したいとも思います。なぜなら、私は自分が政治の実践の場に不向きであることを自覚しています。むしろ私はそこから遠ざかろうとする傾向さえあります。だから、その方面に才能と能力のある友人たちが、願わくば栄光ある共通の理想への忠誠心を失わないままに、そちらに進み続けることを望むのです。

パ・ルムにお伝えしてもよいと思うのは、マシユミのような近代主義イスラームの倫理についての考えを、私はすでに、一九七六年のウイスコンシン州マディソンのインドネシア会議での演説において表明しているということです。以前の手紙でお話したように、その演説は、他の演説とともに出版までされました。それから一九八〇年にイスラームの復興をめぐる会議が開催されたときも、私はインドネシアについて語る機会を与えられました。そのときの簡単な発表原稿もまた、他の原稿とともに本になりましたが、そこで私は、インドネシアにとって最も必要なのは、マシユミの知識人たちによって切り拓かれたようなイスラームの近代主義をさらに深めていくことであろうとまとめました。それから一年後、オハイオ州のアセنز郡で、私は、メダン出身のマハディ教授や著名な作家であるサトヤグラハ・フリップ氏ら全米インドネシア学生協会 (Paritas) のメンバーである友人たちの前で、特別な発表原稿を配りました。そこで私は、国民の倫理のあり方とこれまでに書いたようなインドネシア版ワスプの可能性について問題提起を行いました。私はわが国が、グンナー・ミュルダールの用語を借りていえば、とりわけ倫理の分野において「軟性国家」となっていることへの失望を表明しました。

たとえば汚職が猛威をふるうのは、とくには倫理面が弱く、何が権利で何が不正であるのかの境界が曖昧であるからです。さらに主張したいのは、倫理が脆弱なひとつの原因は、私たちの一部の間の行き過ぎた相対主義や折衷主義、

とりわけ「クジャウエン」¹⁶の教えに見られるようなそれではないかということです。タサウフや神秘主義についての学問的検討は、それらをもつてしては、一元論的な教えも、善きことと悪しきこととの判別も、不可能であるか、きわめて困難であるということを明らかにします。(たとえば、イブン・アラビーの一元論的で奇抜なコスモロジーにおいては、イブリス＝悪魔は、栄えある神の創造物であるアダムの前にひれ伏さないことで神の試験に耐えたことを理由に、天国の最上部に入るとを訴えます。イブン・アラビーによれば、イブリスは、ただ神のみがひれ伏す対象であることに気づいていたというのです。だからイブリスは最上のタウヒードを理解し、それゆえ天国の最上に位置すべきなのと！)。ましてやクジャウエンは、公平に見れば正しいといえなくもなく、ときに感銘を与えるような事柄も散見されますが、明らかに「グゴン・トゥホン」「してはいけないこと」や迷信、妄想にあふれたものです。これ以上の具体的な話はやめておきましょう。

少し前から、私のことについて触れたり、私の言葉を引用して紹介したりする外国の研究者がちらほらと出てくるようになりました。最近知ったのは、ルース・マクヴェイが、ジェームス・P・ピスカトリーの編集した本で、私がインドネシアのイスラーム近代主義者の思想をラディカルに再解釈しようとしていると触れていました。「ラディカルに」というところは私にはよくわかりません。しかし、イスラームの近代主義にたいする私の関心は、この手紙でご説明していますように、純粹で正しいものであると願っております。また、インドネシアのイスラーム近代主義について語るなら、私はマシユミの知識人層が話題の大半を占めることになるだろうと思います。そして、私は自分に政治の才覚がないことを十分に理解していますが、より基本的で根底的な性格をもつ政治思想については非常に強い関心を抱いており、そのため政治生活における倫理の問題がいつも私の思考を賑やかにするのです。このように申したからといって、それは私自身が、個人的な倫理と高い道徳心に支えられた神聖な顔つきをしてふるまうということ

ではありません（それは私個人の内部における問題です）。私はその倫理の問題が私たち共通の課題、ウンマの課題、国民の課題として汎用的であるのだと主張したいのです。

シャファイイ・マアリフ氏は祖国に戻ってすぐに、倫理の問題を主要テーマとして彼のさまざまな考えを伝えていきます。彼は、正統な宗教のなかに、とりわけクルアーンのなかに源泉を見出し、倫理を掘り出すべきだと言っています。シャファイイ氏のその発信は、彼の手紙によると、ありがたいことに周囲に歓迎されているようです。現在、多くの友人がシャファイイ氏の構想を支持し、それを発展させることを望んでいます。以前の手紙で申し上げたように、倫理の問題は、すでに社会に広まっている健全な物の見方と私たちの宗教の基本的な教えとの有機的なつながりを知らしめるために、また根本的な物の見方をさらに発展させるために、知的研究をきわめて必要とする事柄にあたります。その探究は、本質的で、包括的で、アド・ホックではないアプローチを用いて行われなくてはなりません。これがなせるのは、ただ私たちが宗教の主たる源泉である聖典と預言者のスンナに真に立ち返ったときだけであり、それとともに、歴史的に創られてきたイスラーム理解の基準への批判的な見直しも行うことが必要となります。その探究の成果は、さらなる発展の踏み台となるように、ひとつの構想として提示されることが望まれます。

その一方、聖典に「アッラーのスンナ」にも注意をはらうよう命令として記されているように、私たちは人間の共同生活における「アッラーのスンナ」の具現である歴史を学ぶことよって探究をより深みのあるものとしていかねばなりません。インドネシアについては、政治生活における倫理の問題について最も身近で重要であるのは、マ

16 ジャワに由来より存在する信仰。通常、敬虔なムスリムにたいして、名目上はムスリムでありながら、その世界観や生活様式において敬虔なムスリムとは区別される社会集団の信仰として扱われる。「クバティナン」や「ジャワ教」、あるいは「ジャワ・イスラーム」として考察の対象となってきた。

シユミの知識人たちのその分野における闘争の歴史です。それから、人間社会のなかに存在する「アッラーのスンナ」から学びを得るため、アッラーの命令を実行する目的において、私たちはさまざまな学問のディシプリンの助けを借りる必要もあります。この場合、社会科学や人文科学は常に関連性をもちますし、文化的で知的な遺産に富むイスラームの歴史を理解するためのディシプリンも必要です。

私は近いうちにパ・ルムとお話しができることを望んでいます。願わくばそれが、心身にわたって、私たち全員に有益であることを確信しています。私と仲間たちはこれまでたくさんの過ちを犯してきましたが、それらの過ちは、とくにパ・ルムのような人物の助力を得ながら容易に正すことができます。

最後に、パ・ルムのお気持ちのすべてに感謝申し上げます。周囲の方々によりしくお伝えください。願わくば、早いうちに再会の機会がありますように。

平安あれ。

誠意をこめて

ヌルホリス・マジッド

ハ モハマッド・ルム「私にとっては『イスラーム、イエス。イスラーム政党もイエス』です」

ジャカルタ、一九八三年八月三一日

平安あれ。

親愛なるヌルホリス君

『インドネシアにおける社会主義政党の発展』と題するロバート・J・マイヤーズの博士論文が同封された一九八三年六月二二日付のあなたの三通目の手紙は、無事に届き、私の手元にあります。

ただたいへん残念なことに、私は手紙を受け取ったという知らせをすぐにあなたにできず、しつかりお礼を言うこともできませんでした。そのことであなたに深くお詫びを申し上げます。

このところ私は、昨年オランダで受けた手術の影響から、やや健康を崩していました。三〇年前にコバルト線治療を行ったせいで首の右側の皮膚が崩れてしまっており、今回の手術はそれを整形しようとするものでした。三〇年前、その部分に良性の腫瘍ができて治療が必要でした。しかし、治療に使ったコバルト線は、三〇年をかけて修復が必要なまでに皮膚をボロボロにし、ついには右肩と左肩の皮膚を移植することになりました。インドネシアの医師たちは、私が高齢であるということから、その手術を行うことを躊躇しました。それで私は、その手術を請け負ってくれる施設のあるオランダへと渡ったのです。

その後、ルム夫人「ルムの妻」も手術を受けなくてはならない状況となりました。一〇年前から見つかっていた胆嚢の石を取る手術です。その胆石が見つかったときに医師は、ルム夫人がすでに高齢であることから、手術をするのではなく、投薬と減量を行うことを薦めました。しかし一〇年が経ち、若い医師たちは手術が必要だという所見を示しました。ありがたいことに、その手術はうまくいきました。この前のレバランの日、ルム夫人はまだジャカルタの病院にいました。その経験は私にとってありがたいを感じさせるものでした。若い医師たちは年配の医師よりも思い

切りがよいものですが、彼らはすでに相応の能力も備えていました。

そうした出来事がある一方で、私はロバート・J・マイヤーズの博士論文を何部か複写して、ナシール氏やアンワル・ハルジョノ氏に一部ずつ配りました。ほかにはダワム・ラハルジョヨ氏や『パンジ・マシヤラカット』の編集部が、複写のために本を借りて行きました。

ほかにお伝えすることとして、それぞれが二通出し合ったあなたと私の書簡交換も、多くの人の関心を引いていきます。手紙を借りて自ら複写した人もいれば、私が複写をして渡した人もいます。

あなたから送られてきたこの三通目の手紙については、まだ私が返信をしてもいないのに、複写を願う人がいるぐらいです。とうとうアデイ・サソノは、この書簡交換を出版してはどうかと言いついにしました。私はやぶさかではないのですが、まだあなたの意見を聞いていません。このあなたと私の書簡交換は、もちろん公にすることを目的とはしていませんが、しかし実際にはすでに多くの友人が関心をもつて読んでいます。イマドウディン君が、あなたと私の間で対話が開かれたことがうれいしと手紙をくれたのですが、それを読んで私自身がたく感じました。さて、今回もまた、私の返事はあなたの手紙ほど長いものではありません。

私はあなたが手紙の末尾に書いたことへの少々のコメントから始めたいと思います。あなたは、「私と仲間たちはこれまでたくさんの過ちを犯してきましたが、それらの過ちは、とくにパ・ルムのような人物の助力を得ながら容易に正すことができます」と書きました。

過ちを認めるというのは、イスラームの教えによれば賞賛すべき行為です。そこで私が思うのは、あなたがただ自分の過ちについて触れているだけなのか、それとも仲間たちの許可を得て、彼らの過ちについても触れているのか、ということですか。それからあなたは、「これまでたくさんの過ちを犯してきた」と言いながら、「それらの過ちは容易

に正すことができます」とご自分を評価なさっていますが、それはあまり美しいことのように聞こえません。あなたが過ちを犯したとみている人たちは、その過ちが大きなるものであろうとも、きつとあなたを許してくれるでしょう。それとは別に、「たくさんの過ち」を正すことに参加させられることを私は重荷だと感じます。その過ちが何であるのかも分らないわけですから。

あなたとお仲間たちは、私にたいして過ちをおかしてはいないでしょうか。この書簡交換のなかで私は、あなたが「イスラーム、イエス。イスラーム政党？ ノー」と述べたことについて触れたことがあります。ここでもう一度触れさせてください。あなたがそれを発言したのを讀んだとき、私の心に浮かんだ答えがありました。その答えはただ書いておらず、あなたに伝えてもいません。何かというそれは、私の信条からすれば、「イスラーム、イエス。イスラーム政党もイエス」であるということです。私自身の人生において、イスラームは生活の指針であり、イスラーム政党は、私が闘い、善行に励むための場所でした。ロシアン・アンワルとの論争のなかで私は、スカルノにとつてさえ政党はとても重要なものであったと発言しました。もし国民党がなければスカルノとは誰だったでしょうか。スカルノは国民党から作られ、国民党のなかで育ったのです。

これは過去の話だと思いつつも、再び振り返らせてもらいました。これまでの書簡交換でもすでにお伝えしていることですが、一人の政治家として私は、ときに耳に心地よくないことを聞いたとしても、驚きも呆れもしないし、ましてや怒りもしません。

さて、ロバート・J・マイヤーズの博士論文を讀んだダワム氏は、インドネシア語の翻訳書を出版しようと考えているようになっているようです。私の意見は否定的です。その博士論文について反論すべきことをきちんと反論しないように訳書を出すと、それは、私たちが必ずしも賛成できない、あるいは多くの面で賛成できなかったシャプリルの思

想の宣伝にすぎないものとなっております。

あなたの二通目の手紙で伝えられたシャフリルによるインドネシアの政党の分類を読んで、私は少々驚き、呆れました。ナシール氏に伝えると、その類のことがシャフリル自身の口から語られたとは思えないと言いました。ただナシール氏は、社会党のほかの小さな指導者たちなら、そうしたことを言う者がいるかもしれないと付け加えました。ともかくもロバート・J・マイヤーズの博士論文では、私が初めて接するような新しい説明が行われていました。

私たちは自身は、社会党が前衛であるともブレイン・トラストであるとも名付けたことはありませんし、そう扱ったこともありません。それにしても、人が自らについて良いことばかりを言うのを止めるのは難しく、ときに不可能なことです。あなたにすでに手紙で説明したように、シャフリルはたしかにスカルノ大統領によって三度まで首相にされ、内閣を率いました。私とて、三度にもわたり内閣を率いた指導者について、その内閣が失敗だったなどとは言えないことを認めます。しかし、だからといって前衛であったとかブレイン・トラストであったなどと彼が主張してよいかといえば、私は頷きかねます。

ひとつ思い当たることがあります。ロバート・J・マイヤーズが引用した資料は、海外(ラングーン)で出版された文献です。あそこは国際社会主義組織の拠点ともされる場所です。ロバート・J・マイヤーズによって引用され依拠された文献は、インドネシアではそれほど知られていません。海外でインドネシア社会党を紹介するときのシャフリルは、実際あのような調子であったのかもしれない。

また、私たちはインドネシアにおいて、社会党の人々の発言に慣れている面もあります。社会党のメンバーによって多く使われる言葉といえば、社会的に価値のある誰かをさす「オラン・キタ(私たちの側の人)」です。社会党の人々は、それが黨員でなければ、少なくともシンパとみる傾向があります。もう長く人はモフタル・ルピスを社会党の人

間だとみなしていますが、実は彼はシンパでさえありません。

マシユミは最も多くの黨員を抱えていたので、そのぶん多くの者が間違った目で見られていたことでしょう。社会党の彼らは、政府の内閣には（どこにでも）社会党の人間が多くいると思っていました。いま現在の内閣でさえ、社会党の彼らなら、エミル・サリムは「オラン・キタ」、アリ・ワルダナも「オラン・キタ」だと多くの者がみなすはずです。

誰から聞いたかは触れる必要がないと思いますが、私自身、ある社会党の指導者が「以前、シャフルディン氏はオラン・キタであったが逃げていき、ナシールという、より優れた代替りの人物を見つけた」と語ったと聞いたことがあります。

たしかに、インドネシア社会党がインドネシア共和国の歴史において、具体的にはスタン・シャフルルが首相を務めた時期において、重要な役割を担ったことがある事実は認めなくてはなりません。以前の手紙ですでに触れたとおりです。スカルノ、ハッタと何人もの指導者たちは、「日本軍と協力する」ことを前提に三年半の時を過ごしましたが、その最後の時分において状況は変化しました。日本は敗戦で追いつめられました。それゆえ最初の内閣は革命内閣から望まれたように周到なものではありませんでした。そしてオランダはスカルノとの会談を望みませんでした。彼が対敵協力者であったからです。スカルノと話をしても不毛だというわけです。シャフルルは、ハッタに署名された「一〇の布告」とともに表舞台に出てきました。これでオランダにとっては交渉しない理由がなくなりました。なぜなら、シャフルルは対敵協力者ではなかったからです。

私たちは、その時代、シャフルルによって閉塞状況が解かれたことを認めないわけにはいきませんでした。しかしやがて、社会党のメンバーたち、あるいはシャフルル自身が、すべては自分たちの手柄であると主張するようになって

ていきました。

そうした経緯があり、小政党に転落した一九五五年総選挙の苦い現実を、社会党の人々は受け入れようとしませんでした。彼らはナシールやほかの誰彼を「わがもの」にし、さらに「オラン・キタ」とみなすことによつて、政治の世界で権力を維持していると自らに思い込ませていました。それがつまり、「まだ大政党でありたい小政党の幻想」と私が述べたことです。

私は、なぜあれらの話が政治界で生まれたのかあなたが理解し、知るために、これらのことすべてをあなたに説明すべきだと感じています。本当はこの問題は書くべきことではありません。空気を淀んだものにしてしまふからです。どうか私たちがすでに大人であり、大人の態度でこれらの問題を受けとめていけたらと思います。このような問題について書けば書くほど、この書簡交換もあまり多くの人の目に触れられるべきものではなくなります。あなたは私とロシアン・アンワルとの論争を読んだことがあるでしょう。ロシアン・アンワルがスカルノを、オランダに屈服したとして非難したときの論争です。ロシアンはただイングルソンの本に依拠して議論を行つただけでした。スカルノをそのときに擁護したのはたまたま私でした。論争は『コンパス』誌に継続して掲載されましたが、いまはハル大学(英国)のウィー・ホン・リーの執筆物に収録されています。

私は、あなたがご自分の研究を仕上げたあとに、ロバート・J・マイヤーズの博士論文の批評を書けばよいと思っています。それを行えば、当然多くの注目を浴びることになります。私は、カトリック党やパルキンド党の指導者たちも、「衛星」とみなされることをそのままでは受け入れないと思います。彼らはゲームの規則に従つてシャフリルの内閣に参加したのです。社会党が前衛やブレイン・トラストであるとはみなしていなかったでしょう。彼らは自らの頭脳を持つており、キリスト教やカトリックの諸原則を実践するためにそれを使つていました。

私の返事はこのあたりで。私たちが愛するムスリム共同体の改善のための意見交換を行い続けられるように、あなたが早く祖国に戻ってくることを願っています。
平安あれ。

九 モハマッド・ルム「ナシール氏は精神面の指導者でした」

ジャカルタ、一九八三年九月八日

平安あれ。

親愛なるヌルホリス君

あなたに手紙を書く、それを送った後でもときどき、書いたことが頭のなかで反響します。

あなたがお母上の態度について言及したのを読んで、少しコメントしておきたいという気持ちが生じました。あなたが書き出したお母上の言葉をスラバヤの方言に直したらどんなに美しいことだろうと私は想像しました。

あなたは、ウンマと祖国の発展を気にとめるお母上を持つて幸せです。私は彼女の意見に大いに賛同します。ナシールは、このインドネシアにおいて、一番といえるかどうかはわかりませんが、少なくとも最も賢い人物の一人でありましょう。私は忘れていたことを思い出しました。ナシールは、こんにちのインドネシアにおいてムスリム共同

体の精神面の指導者であると述べた人がいます。間違っていないければ、その評価はコーネル大学の誰かによるものであつたと思います。誰であるかは忘れしました。

それから、このところいつも私の頭をよぎる考えなのですが、もしあなたとの書簡交換がいまよりもさらに広く読まれるようになったら、それは得なのでしょうか、損なのでしょうか。私は、いまのままで十分という結論にたどり着いています。より広く読まれるのはあまり良いことではなさそうです。この書簡交換でたびたび名指しされているシャフリルは、もうこの世にいません。そして、どんなに欠点があつたとしても——欠点のない人間など存在するのでしょうか——私は彼を尊敬し、評価しています。困難な状況にあつた祖国にたいする彼の功績はたいへん意義あるものでした。そのことは、これまでの手紙で書いたとおりです。撤回すべき言葉は少しもありません。

検討の結果、この書簡交換を出版するというアディ・サソノの提案に私は賛同しません。ただし複写は渡し続けます。あなたと私の間で行われているこの書簡交換を若い人たちが読めば有用であろうという見解は持ち続けています。したがって、私の意見としては、この書簡交換の読者は、できれば現在いる以上に広げないでいただきたい。私もそこはきちんと線を引くつもりです。

マイヤーズの博士論文についてですが、学問の世界の自由というものがあります。あなたは、存分に、意見の異なる点や賛同しかねる点についてコメントすればよいと思います。あえてここで強調すれば、私自身は、インドネシア社会党が、マシユミ党、カトリック党、バルキンド党の前衛ないしはブレーン・トラストであると誰かが言うのを讀んだことはありませんでした。

もしダワム・ラハルジョがマイヤーズの論文をインドネシア語に翻訳する希望を持ち続けるのだとしたら、著作権者を除けば誰の許可もいらぬわけですから、翻訳を行えばよいことです。

以上が先の手紙の補足です。よろしく願います。
平安あれ。

追伸…この私たちの書簡交換がお母上の目に触ればよいなと思います。

一〇 ヌルホリス・マジッド「私はたくさんの過ちを犯しました」

一九八三年九月一五日

モハマッド・ルム様

テウク・チック・デイトロ通り五八番

中央ジャカルタ

インドネシア

平安あれ。

訳 翻

親愛なるパ・ルム

アツラーに感謝を。八月三十一日付のパ・ルムのお手紙はすでに届きました。続いて本日、九月八日付の補足のお手紙も届きました。近ごろルムご夫妻の体調がすぐれなかったというお話を伺い、またそれどころか手術にまで及んだというお話を伺って、甚だ悲痛の思いがいたします。

一方で、ルムご夫妻の体調が現在は回復しているとのことでもあり、感謝の言葉を発せずにはられません。私は常に、ルムご夫妻のご健康が維持され、神へのご奉仕をさらに続けるべく神から長寿の恩恵を授かるようにと祈っております。

パ・ルムが、インドネシア社会党に関するロバート・マイヤーズの博士論文を「新説」と評されたことを喜びます。そのパ・ルムのお手紙もまた、私にとつて新しさを含むものでした。それは、ラングーンの国際社会主義図書館にある文献がインドネシアでは知られていないとおっしゃる点です。海外向けの著作でシャフリルが、彼の政党とその運動について、国内向けの著作とは異なることを書いていたのではないかというパ・ルムのご推測は、注目に価すると思います。それが事実であったとしても驚くようなことではありませんが、ある人物の考えを理解しようとすることに、そのようなこともありうるのだと覚えておくことは大切です。私たちのいずれかが同じようなことを行う可能性がないわけでもありません。

パ・ルムがおっしゃるように、パ・ナシールが、あの論文でシャフリルが発言したとされている主張がシャフリル本人の口から出たと信じていないというのは、もつともなことなかもしれません。パ・ナシールはシャフリルがどのような人物であったかをもちろん理解されているわけです。書かれたことが真実であるならば、パ・ナシールの立場は損なわれてしまうわけですが。おそらく、ジョージ・ケーヒンらの海外の観察者が、パ・ナシールはマシユミのなかの「左派」ないし「社会主義グループ」の指導者だと言っているのも、そうしたところ「国内資料と海外資料の

「違」からきているでしょう。そしてやはり同じ背景から、インドネシア共産党（D・N・アイディット）は、インドネシア共和国革命政府は「大政党に乗った小政党的運動」であると評したのだと思われまます。いずれにしても、私たちの間で力を尽くしあつてこの問題を説明しようとするのはとても良いことだと思います。それは、ウンマの歴史のなかに刺さった棘を取り払うような作業です。パ・ナシールご本人やパ・ルムのような年長者によつてそれが完遂しないのであれば、アンワル・ハルヨノ氏のような若い人物が、彼を支援してくれる人々が多くいる間に、代わつてできるようにと私は願います。

M・ダウム・ラハルジョ氏がマイヤーズの論文の翻訳を企てている件についても同様で、私はパ・ルムが「その博士論文について反論すべきことをきちんと反論しないうちに訳書を出すと、それは、私たちが必ずしも賛成できない、あるいは多くの面で賛成できないシヤフリルの思想の宣伝にすぎないものとなつてしまふ」というパ・ルムのご意見が正しいように感じます。いま考えなくてはならないのは、もし問題の所在を真に知る人々が語らないのであれば、誰がその「必要な何かを言う」べきであるのかです。パ・ルムがおっしゃるように、この件は空気を淀ませる問題でもあるので、その点がなおさら重要となります。空気を淀ませるとはいつても、歴史解釈が歪んでいるのであれば、それを直すことは必要です。パ・ルムは、私がマイヤーズ論文の批評記事を書くことを期待してくださいました。私はそのことに大きな関心を覚えますが、私では権威不足ではないかとも思います。再び私は、アンワル・ハルヨノ氏のような旧マシユミの若い人物にその役割を期待したいと思ひます。また、補足のお手紙でパ・ルムがおっしゃつたように、ダウム氏もこの批評を行うかどうかを決める学問的な自由を完全に得ています。

パ・ルムが何度もおっしゃつたパ・ナシールに関する社会党の人々の主張についてですが、それは公然の秘密となつてゐるようです。しかし、パ・シヤフルディン・プラウイラヌガラにたいする彼らの評価についていえば、私は

少し異なる見方を聞いたことがあります。パ・ルムの言葉によれば、ある社会党の指導者がかつてパ・シャフルディンは「オラン・キタ」であつたが逃げた。そして「ナシール」という良い代わりを見つけたと語つたそうですが、他方が聞いたことがあるのは、パ・シャフは、本当はより社会党に近い思想的立場にあつただけけれども、彼の出身地であるバンテンがイスラーム色の強い地方であることを考慮してマシユミに加入していたのだということです。実際のパ・シャフが非常に敬虔なイスラーム教徒であることを思い起こすと、この話は奇妙に聞こえます。ブン・カルノの政権によって拘留されたマシユミの（西洋／オランダの教育を受けた）知識人たちのなかでは、パ・シャフは釈放後、宗教上の説教を最も見事に行つた人です。しかしながら、パ・シャフは、社会主義はイスラームの一部であると述べたパンフレットを書いた人物としても知られていました。それ以上に知るべきこととして、パ・シャフはその考えと行動において、共和国の初期の数年の間に、クデイリ地方の農民たちの生活水準を引き上げること注力し、その結果、彼らが中国系資本から解放される、あるいは中国系資本とわたりあえるところまでたどりついたことで、外部の観察者の感銘を得ました。そのパ・シャフの考えや行動は正しく社会主義者と呼ばれるものであつたかも知れません。

私は、私や仲間たちが社会主義の人々にたいして対立的だという印象が生じることを望みません。むしろ私は、現在まで、社会主義的な方面との知的交流からかなり多くのものを得ており、そのことを幸運に感じています。そして、パ・ルムと同様に、私は変わらずスタン・シャフリルを評価しています。私が社会党とマシユミの関係の本質の問題に大きな関心を示すのは、「マイヤーズらによつて行われるような」主張が真実であるとして、その二政党の間にならば、そのような間違いがなぜ起きているのかを私はぜひ知りたいと思つています。これこそが、パ・

ルムとの書簡交換において私が感謝してやまないところでもあります。なぜならこの書簡交換においてはすでに多くのことが説明されてきました。現在なされなくてはいけないのは、歴史の専門家など権威ある人々によって、事の真偽を明らかにするための検討をさらに進めていくことだと思えます。

さて私は、前回の手紙のなかで私が「過ちを自認」した点についてパ・ルムが忠告と助言をくださったことに感謝を申し上げます。パ・ルムは、「過ちを認めるのは、イスラームの教えによれば賞賛される行為である」ということを思い出させてもくれました。神の使徒も、「他人の過ちではなく、自分の過ちによく気づく人は幸運だ」と言っています。聖典でも「自分自身のこと、両親のこと、親族のことについてであってもアッラーのために公正な態度をとりなさい（女性の章「四章」一二四節）」と書かれています。そして私は、「苦くても本当のことを言いなさい」というハディースの意味は、ただ他人を批判し、その過ちを主張することがしばしば苦い結果を残すことを示しているだけではなく、もちろん自分自身の過ちを認めることも意味するものだと思います。まさにそれは、苦い味をともしうものです。

私は、過ちや失敗を認める倫理といえるものを、私たちの義務として実現しなくてはならないと考えています。残念なことに、その倫理を最も強く保持しているのは、ムスリムではなく、日本人です。私たちは「ハラキリ（腹切り）」の伝統を賞賛するわけにはいきません。しかし、私たちは自分や部下の過ちを素早く認め、責任を取る日本の指導者たちにたいして実に感銘を覚えます。もちろん、仮に昔も今も将来も、インドネシアの指導者たちがそのような倫理を身につけ実践すれば、その結果、間違った行動、多くの人に損害を与える行動をとったり後押ししたりした人は、誰であれ臆せず過ちを認め、結果に責任を負うようになる（なった）でしょうし、インドネシアの歴史と発展はたいへん異なるものとなる（なっていた）でしょう。

私は、パ・ルムがとりあげてくださった、「私たちはかつてたくさんのおちを犯した」という私の前回の手紙における発言の意図を説明したいと思います。この「たくさんのおち」において私が意図したのは、個人にたいする個人のおちではなく、社会への伝達のための用語の使い方をはじめとした、考えや構想を提示する方法をめぐる私たちのおちです。最初の手紙で書きましたように、私たちは構想していることそれ自体については確信を抱いていましたが、一般に向けてそれを提示するための方法や名づけの問題についていつも頭を悩ませていました。そして、起きたそのおちを自覚していたのは私だけではなく、仲間たちも同様でした。私がアメリカに旅立つ前にジャカルタにいたときも、アメリカに来てからの手紙のやりとりを通して、そのことがよく話し合われました。私が前回の手紙で仲間を巻き込むような発言をしたのはそれが理由です。ある手紙で、ジョハン・エフェンディ氏は、私たちが過去の経験から学んで、より適切な伝達の方法や用語の使用をできるようにしたいものだと言いました。また、たとえば、かつてジャカルタのM・ダワム・ラハルジョ氏の自宅で討論をするなかで、この友人は、自分が所有する社会科学百科事典の説明に基づいて、「世俗化」(「世俗主義」とは区別されるところの「世俗化」です)という用語の使用における問題点を指摘していました。同様に、故アフマッド・ワヒブ氏がその日記において綴った批判についてもお話しすることができません。彼は、私が意図している「世俗化」は、ムハマディヤによって行われてきた以上のものではないと書きました。日記において彼自身は、とても「ジョクジャカルタ中心的」であり、ジャカルタの熱気をあまり理解していないようでしたが、首都にいる私たちへの数々の批判は十分に根拠のあるものでした。「刷新」という言葉についても同じことがいえます。それは「宗教の刷新」(ありえないことです)を意味するのではなく、ただ「思想の刷新」を意味するものでした。有名な「タジッド(刷新)」についてのハディースも存在します。しかし、ある方面の方々にとってその言葉はネガティブな意味を含んでおり、その理由から「刷新」もやはり用いるべき言葉ではなかったと

いえませす。「刷新」と表現するのではなく、宗教を理解するさいの学問的アプローチを強調すべきであったと思います。その学問的アプローチをもって、私たちは何がイスラームの「本当」であるのかを、またイスラームが一四世紀間にわたって続いてきた発展の条件を知ることができそうなのだ、と。

ほかにあげられる私たちの過ちとして、代案を示すことをあまりしないで批判ばかりを多く行うというネガティブな傾向がありました。成功するか失敗するかにかかわらず、私たちはそれらの批判が民主的で開かれた社会に必要なものだと考えていました。しかし、よりポジティブに代案を示すことも、いうまでもなく私たちの義務でありました。また、他者や集団の良い面を探し、認めることも、そのポジティブなアプローチには含まれます。これは、違いや対立点は多くあれども、イスラーム法をめぐるすべての学派は正しいとするムスリム集団間の認知として表される「内部相対主義」の考えとも相通じます。その「内部相対主義」（別に適切な名前があればそれでもよいのですが）は、今すぐにも展開されていくべきかと思えます。それに現在、ムスリムは（願わくば）宗教を実践することにおいて以前より大人になってきています。法学派間の見解の相違をめぐる諸問題を掘り返さなくなったことなど、その証のひとつといえます。この考えが念頭にあり、私は以前の手紙において、ワスプの倫理との比較で、インドネシアではマシユミの知識人たちの倫理を掘り起こし、継承する必要があるのではないかと述べました。多くの人にとって皮肉に聞こえるでしょうが、このことを頻繁に指摘していたのはマシユミをよく批判していた故アフマッド・ワヒブ氏でした。批判しながらも彼は、彼によると高尚な性格をもつマシユミの人々について感銘の意を表すことをやめませんでした。

方法論上の過ちはほかにも多くありますが、この手紙ではこれらの諸例で十分かと思えます。これ以上は、願わくば私が祖国に戻った後での話題として残しておきましょう。それらの過ちは構想と考えを表現するための闘争の方法

論ともつながります。きっとパ・ルムは、私たちがパ・ルムの経験からたくさんの学びを得ようと切望していることをよく理解してくださっているでしょう。年配の方々の長所は、かつて若い時期があつたということです。若い人間は年をとったことがあります。(ほかにパ・ルムにお伝えしてもよいこととして、私の学問的方法論は、コロンビア大学に在籍したマレーシアのムハンマド・ケマル・ハサンの博士論文における批判の対象ともなっています)。

もうひとつ、パ・ルムのお手紙についてお答えしておきたいことがあります。パ・ルムは、ご自身にとって政党(イスラーム政党)は重要であると強調されました。そのパ・ルムのご意見は、私でさえもわかる気がします。なぜなら、パ・ルムは政党活動(マシユミの活動)に力を尽くされた方だから私はこの書簡交換の機会を得たのであり、私たちはまた、政党や元マシユミの方々をめぐるたくさんの問題が語られるのを期待して、この機会に向き合っているのです。

私自身は、政党は、イスラームの諸価値の闘争という広い視点から考えますと、重要にもなりうるし、重要でないものにもなりえると考えます。その点は明らかに状況によると思います。パ・ルムのご観点からすると、過去、今日、あるいは将来のどこを指すにしても、ご自身が想定する状況が、政党「イスラーム政党」は重要だと考えさせるのかもしれませんが。私はまだ、あるパンフレットの文言のことを覚えています。間違っていないければ、それは、一九五五年選挙に備えるマシユミ党の指導部によって作られたもので、父によって、モジョアニヤルにある私のカンポンのモスクの壁に貼られていました。そのパンフレットには、政党を通して選挙に参加することは、イスラームの闘争という目的における義務であると書かれていました。「それがなければ完全な義務の遂行もない、それが法の義務である」というウスール・アル・フィフクの解釈の基本に従った義務であると。マシユミの指導部からの忠告——同じパンフレットに書かれていたのか、違うパンフレットに書かれていたのか、はっきりとは思いませんが——もありました。それはハディースを引用して、「ある用件が専門家に任せられないようなら、破滅を待つしかない」と書かれた

ものでした（NUのメンバーである叔父の一人によれば、それは、ウラマーは政治分野の専門家ではないという評価を暗に含むものでした）。しかし、現在発せられるべき疑問は、状況はまだそうした以前のようなままなのか、以前の考えを支持し続けなくてはならないものなのか、ということ です。これは、今度私たちが会うときにぜひとも話題としたいことのひとつです。

ところで、パ・ルムは、あの一九七〇年の私の論文のひとつの文言を引用されました。本当のことを言うと、私は論文で、パ・ルムが引用しておられるような「イスラーム？ イエス。イスラーム政党？ ノー」とは書いておりません。正しくは、「イスラーム、イエス。イスラーム政党、ノー？」です（文の最後に疑問符をつけたものが私の論文のサブタイトルでした）。なぜなのかはわかりませんが、私の論文を紹介するかたちで広まった文言では、おおかた疑問符が抜かれてあります。しかし、あの論文の精神において示されているものは変わりません。私はそこで「断言を避け」疑問を投じるとどめているのです。理由は曖昧でしたが、イスラームという宗教を受け入れながらイスラーム政党を拒絶する態度について、私自身、多少の懸念を抱いていたためでした。それにまた、あの論文は、「マシユミ党というよりは」そのときのイスラーム政党のイメージを念頭に置いたものです。

あの問いかけ自体は、実際は、当時のインドネシア学生連盟のリーダーであった私自身の経験に由来するものでした。バンドン支部の仲間たち、とりわけバンドン工科大学の仲間たちは、キャンパスの学生から会員を募ることが難しいと、ため息をついていました。彼らによると、「イスラーム、イエス。イスラーム学生連盟、ノー」という主張が広まっているということです。キャンパスの学生たちが、お決まりのように、サルマン・モスク¹⁷で宗教的な

17 スカルノの母校であり、国内で最も高い位置づけにある大学のひとつであるバンドン工科大学（ITB）に一九七〇年代から置かれたモスク。政治的な閉塞状況におかれたスハルト政権時代に、自らと自社会のアイデンティティを問い直した結果として、イスラームに回帰し、ダーワを展開する学生たちの拠点となった。

活動を行うようになっていたことがその事実を裏付けていました。私は、インドネシア国家学生運動(GAMU)のような——イスラーム系大学のサークルではない——組織に参加経歴のある学生たちをサルマンのサークルに引き入れた功績のあるイマッド氏(イマドウディン技師)をはじめ、サルマン・モスクの主要な活動家たちの見識がそこに働いていたと思います。イマッド氏は、かつて私に、ダーワ(宣教)という目的の達成のために政治は隅に押しやるべきだ。なぜなら、あらゆるダーワ(呼びかけや誘い)の論理は、インクルーシブで開かれたものであるべきだからだと言いました。これは、状況や人々の心の求めに合わせてつつ、高度な立論をともにしてダーワを行えという聖典の教えの実行のひとつとしてもみることができます。イマッド氏はまた、私に会うたび、いつ一緒にダーワを進めるかと催促し、同時に、私が政治(の実践)に向かう傾向があるのをみて失望の素振りをみせるのを忘れませんでした。こうした経緯があつて私は、カン・ムッタキエン(K・H・D・r・E・Z・ムッタキエン)に——彼がシカゴを訪れたとき——自分がダーワの「政治」(!)をよく理解しており、それに賛成する側の人間だと喜びを含みながら言いました。ここで私は、以前のお手紙で書かれた、旧マシユミのメンバーのダーワの領域(政党のない領域)における闘争を継続できていることに感謝するというパ・ルムの言葉も忘れていません。

「ダーワ」——。私は、それこそが今後のインドネシアにおけるイスラームの闘争を語るうえで重要な言葉のひとつだと考えてます。これは、政治や行政、経済など、ほかの分野の事柄の重要性を否定するものではありません。私たちは依然として仕事の分担を必要としています。それぞれが自身の才能や能力に合う分野を選んでいけばよいのです。それもまた聖典において求められていることです。しかし明らかなのは、ダーワがほかの追随する事柄よりも大きな注目を求めているということです。クルアーンの悔悟の章「九章」一二三節に忠告があります。イスラーム教徒全員が(政治、経済、その他のぶつかりあいの場に)進まずともよい。望ましいのは、すべての集団に何人か宗教を

深めた者がいて、彼らがほかの人々にたいしてアツラーへの畏怖を忘れないように忠告（ダーワ）を行うことであると、そこには書かれています。

私は、パ・ルムがご自身の著書である『著作集 第三集』を送ってくださったことに感謝の意をお伝えします。私には本当に、パ・ルムの開かれた態度に感銘を受けております。パ・ルムは、カシモ、レイマナ、シャフリル、オヨンなどなど、集団や宗教を違える人々にたいしても尊重を怠らない態度をもつ力を示してくださいました。民主主義は、社会のエリートたちが互いに信じ、尊重し合わないところには芽生えないという理論もあります。

アディ・サソノ氏が私たちの書簡交換を出版したいと言っている問題については、私はパ・ルムが補足のお手紙でお書きになったことに同意いたします。しかしながら、パ・ルムがおっしゃるように、この書簡の交換が、関心をもつて読んだ人たちの役に立つことを願う気持ちに変わりはありません。

ところで、私の母（と父）についてですが、もちろんこの書簡交換が行われていることを喜ぶと思います。おそろくもう伝わっていてもいるはずですが、私は私で、帰国してから直接、より詳細なかたちで彼らに話を聞かせようと思っています。

最後に、パ・ルムのお心遣いにあらためて最上の敬意を払わせてください。再び私は、全能のアツラーに、ルムご夫妻のご健康とご安泰をお祈りします。さらに長寿の恩恵が与えられますように。そしてよりたくさんの方の益がもたらされますように。

平安あれ。

誠意をこめて

ヌルホリス・マジッド

追伸…一九八三年六月二二日付の私の手紙で、その五枚目、上から四〜七行のところ、クルアーンの章句の翻訳の引用を付す必要がありました(ルクマーンの章「三一章」一五節)。その引用は次のように読まれるべきです。「もしおまえの両親が、おまえが本当かどうかを知ることができない範囲でわれを一つではないと解釈するような教えにおまえを引き込もうとするならば、おまえは両親に従ってはならない。だが、現世では、良識に則って両親と付き合いなさい。そしてわれの許に帰った者の道に従いなさい」。補正は以上です。よろしく願います。